



幼児の 教育

家庭・保育所・幼稚園

好評発売中!

手づくり アンパンマン いっぱい★ イベントおしらせ デコレーション

千金美穂・尾田芳子 共著

大人気シリーズ『手づくりアンパンマンが
いっぱい②ルームデコレーション』の続刊です。

色画用紙から生まれたアンパンマン
ワールドの仲間たちが、季節のイベントを
にぎやかにお知らせします。
アンパンマンたちといっしょに、
園生活を楽しく
盛り上げて
くださいね。



26×21cm/96頁
定価2,100円(税込)

★ 巻末の型紙をコピーして、
簡単に製作できます。

★ 型紙の組み合わせ次第で
いろいろなバリエーションを
作ることもできます。



【既刊】手づくりアンパンマンがいっぱい

- | | | | |
|---------------|-------|----------------|------|
| 1. グッズ・プレゼント | 島田明美 | 5. 通園グッズ | 島田明美 |
| 2. ルームデコレーション | 千金美穂 | 6. つくってね あそんでね | 島田明美 |
| 3. ぬいぐるみ・おもちゃ | コッペ平沢 | 7. つくってね あそんでね | 島田明美 |
| 4. ランチとおやつ | 大森いく子 | パート2 | 島田明美 |

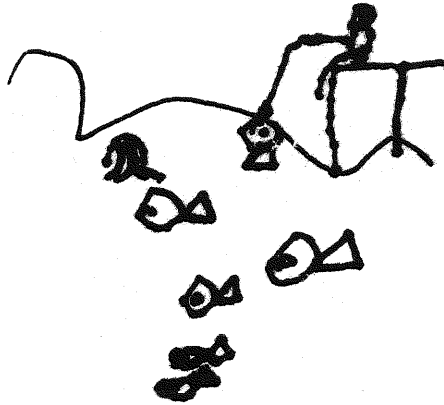
キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第105巻 第6号



幼 児 の 教 育 目 次
 — 第一〇五卷 第六号 —

© 2006
 日本幼稚園協会

巻頭言 もしも 雨が降らなかつたら 吉村真理子 (4)

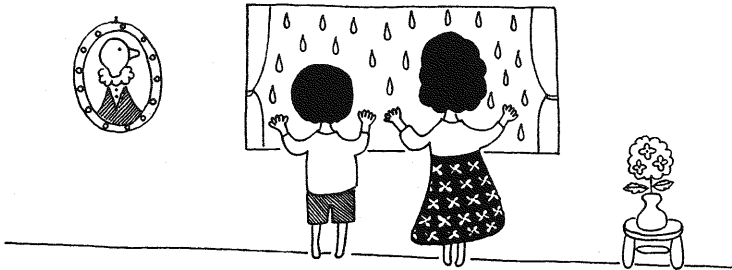
特集〈雨の日の保育〉

雨の日も悪くない 中野 圭祐 (8)

雨の中に昨日が見える、明日が見える 菊地 知子 (14)

雨の日こそ園庭へ 當銀 玲子 (20)

しゅんちゃんの日 川崎 徳子 (25)



子どもたちの学び

—十七世紀オランダ絵画が伝える教育の姿—……………小林 頼子… (32)

児童学からの出発(3)

現代おもちゃと子どもの世界の文法 その一……………森下みさ子… (42)

保育の変革を目指して(2) —折々に考えたこと—……………入江 礼子… (52)

幼稚園百三十年記念企画 アーカイブズ『幼児の教育』(2)…………… (59)

表紙絵／さのまきこ

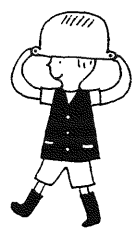
扉題字／津守 眞

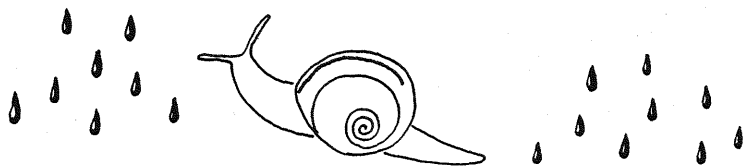
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／さのまきこ

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子





巻頭言

もしも 雨が降らなかつたら

吉村 真理子

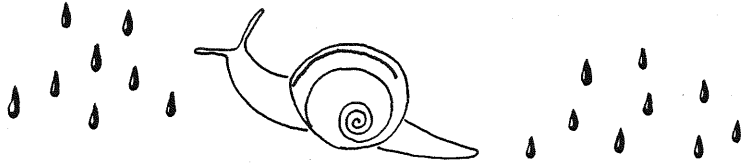
幼いころに見た絵本の中に、こんな子どもの詩がのっていたのを、今でも雨が降るたびに思い出します。

ゆうべのあめは

かしこいあめだ

よるふって あさやんだ

かしこいあめだ



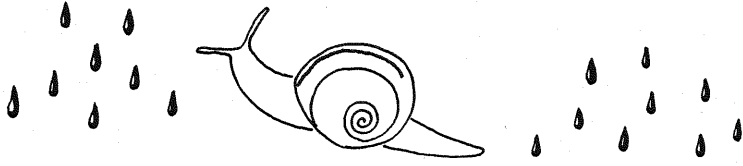
きつと、寝る前に雨の音を聞きながら「明日は晴れて遠足に行けますように」と願った子どもが、朝起きて濡れた葉っぱに当たる太陽の光を見て思わず口をついて出た言葉が詩になったのでしょうか。

梅雨の季節を迎え、何日も雨が降り続いていたら、保育者も晴れることを願わずにはいられません。晴れさえすれば子どもたちは園庭に飛びだしてエネルギーを発散させ、いろいろな遊びを見つけます。

六月の指導計画のねらいには「雨の日を楽しく過ごす」「雨の日ならではの楽しみを見つかる」などがあげられていますが、楽しみを見つけるとは発想を転換することだと思ふのです。私たちの予定は天候に大きく左右され「せっかくなれをしようと思つていたのに雨で残念」ということが多い月ではないでしょうか。

そんなとき、保育者は別のプランを提供して子どもの気持ちの切り替えを図ります。傘をさして雨の中のお散歩。小さい子どもは長靴をはいて歩くだけでも大喜びです。傘の色に染まった空間は自分だけの別世界、傘に当たる雨の音を聞きながら心が弾みます。植え込みや石垣の陰で、カタツムリやカエルが見つつかればこんなうれしいことはありません。

雨が止めば、水たまりやぬかるみは子どもたちの天国です。濡れること、汚れることを気にせず思いつきり心も身体も解放して夢中になることから創造的な遊びが生まれます。

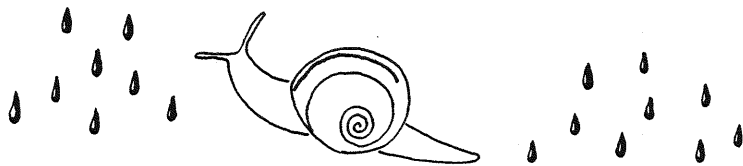


はじめはいやだったことでも、思い切ってその中へ飛び込んでしまうと、思いがけない楽しみやおもしろさを発見することがよくあります。

今年採用された新人保育者も、新しい職場に転勤された方も、この三か月、気持ちのいい晴れた日ばかりでなく、うっとりしく暗い日もあったことと思います。そんなとき、どうやってそれを乗り越えられたのか。子どもと同じように気持ち切り替えたからではなかったでしょうか。濡れたり汚れることを避けて通れば、その先の楽しさは味わえません。

口やかましい先輩が、実はとても親切に後輩のめんどろを見てくれる表現であったり、無愛想な同僚が、恥ずかしがりやのためものが言えなかったことに気がつく職場は急に親しみのこもった空間に様変わりします。相手が変わったのではなく自分の見方が変わったからです。ちょうど太陽が雲間から姿をあらわしたように風景が一変します。

また、保育の壁にぶつかって悩んでいるベテラン保育者も、壁と感じている問題を、自分の行く手を妨げるものとしてではなく、壁は外からの攻撃から自分を守ってくれるものとしてとらえたときに、悩みはむしろ拠り所となることを経験するでしょう。自分のクラスにいる特別に手のかかる子どもは、常に保育の原点である一対一のかかわりの大切さを思い出させてくれますし、性格の合わない複数担任仲間の存在は、多様な価値



観、多角的なもの見方に気づかせて、ひとりよがり陥ることを防いでくれます。壁は、保育者の成長に欠かせないものですが、必ずしも苦勞して乗り越えなくても、横手から迂回しても、はしごを使っても、穴をあけても向こう側に出ることができません。

ときには、いやだなと思う雨も、地球の生物にとってはなくてはならぬ恵みの雨です。私たちがどんなに雨のおかげで快適な生活が保障されているか言うまでもありません。目の前に置かれた「いやなこと」や「困った問題」は、発想を転換してとらえ直してみればいかがでしょう。

最後に、筆者がまだ中学生の頃、英語の時間に習ったクリスティーナ・ロゼッティの詩を（うる覚えなのですが）紹介したいと思います。

もし あめばかりで

ひのひかりが なかつたら

そらに にじは かからない

もし ひのひかりばかりで

あめが なかつたら

やつぱり にじは かからない

（元松山東雲短期大学）

特集 〈雨の日の保育〉

雨の日も悪くない

中野 圭祐

大学を卒業し、希望を胸に就職した新任の年、僕にとって初めての入園式は雨だった。

「こんなことも珍しいね」

とみんなで残念がったのを覚えている。その年は五歳児を受けもった。五月に行われる春の園外保育も雨が降った。これもうちの園では珍しいことだったようだ。その園外保育が延期になって、なんと予備

日も雨だった。五歳児学年の行事の「よるまでようちえん」の日には、台風が直撃して、午後からの登園になった。別の年に五歳児を受けもった時の「よるまでようちえん」は、七月のど真ん中に、雹ひょうが降った。

事ある毎に、僕の保育は雨が降る。今日ばかりは

どうしても晴れてもらわなければ困る、という日に限って雨が降る。僕のいる幼稚園では、いつの頃からか、僕は「雨男」ということになった。その「雨男」ぶりはなかなかたくましくて、天気予報が「晴れる」と謳っていても、まんまと雨が降る。ここまですべて徹底していると、「日頃の行いを改めようか」と思い始めるから恐ろしい。

忌々しい雨……。

そんなこんなで、保育の計画を立てる際に、自然と「雨が降ったらどうしようかな？」と考えるようにはなった。

行事の日には、もちろん晴れてもらわなければ困るし、普段の保育も、希望としては、やっぱり晴れてほしいと思うことが多い。園庭を使ってみんなまで遊びたいような計画を立てる時だってあるし、やつ

ぱり晴れている方が気持ちがいい。でも、そんな希望的観測だけでは保育は進めていかれない。降る時には雨は降る。降らないと思っても降る。

日常の保育を計画する場合に、どうしても戸外の活動を想定した計画を立てることもある。そんな時には、もしこの日に雨が降った場合は、この日に延期にしよう、遊戯室でも同じような経験ができないか、でも、違う学年が遊戯室を使った活動を計画していないかな、といったことを考えておくようにしている。

ただ、そういう風にいつ頃、みんなでこんなことがしたいと、予め計画できるものならばまだ進めやすいのだが、好きな遊びを子どもたちが進めていく中での戸外でやりたい遊びは、雨が降ると、本当に困る。だって、サッカーは外でやりたいし、ドッジボールだって外でやりたい。だから雨は困る。困る

のだけれども、でも実は結構勉強になったりもする。

普段の生活の中で、子どもたちは雨が降ったらどうしよう、などと考えながら遊んでいるわけではないと思う。だからこそ、雨が降った日には、時として思いがけないことを気づかせてくれたり、教師側が「なるほど」と思うようなことが起きたりするものである。

五歳児の六月、毎日のように園庭でサッカーを楽しんでいた子どもたちだが、その日は「生憎の」雨だった。

毎日毎日サッカーをしていたので、いきなり「今日は保育室の中で何か楽しいことをしよう」と思いつくわけでもなく、体を動かしたい欲求がたまっているのを感じた。



僕の幼稚園には、「中央テラス」というものがある。年長の保育室と年中の保育室の間（五メートルくらいあるだろうか）がラバーになっていて屋根がついている空間がある。そこは遊戯室の次に、雨に濡れずに遊べる広い空間になっている。

サッカー軍団は手持ち無沙汰ならぬ足持ち無沙汰になり、始めるべくして、中央テラスでサッカーごっこを始めた。ボールはいつも使っているサッカーボールを使っていた。しかしこのサッカーボー

ルという物体、戸外の広々とした場所でサッカーをするには丁度良いのだが、少し狭いテラスで遊ぶには、跳ね過ぎる、転がり過ぎるで、なかなかうまくいかない。子どもが蹴ったボールは、自分が追いつくよりも前に壁に当たってしまい、跳ね返ってきてしまう。中央テラスでのサッカーはボールが勢いに任せて行ったり来たりするだけの、あまり白熱しないサッカーになっていた。

僕は内心、「やっぱり晴れないと辛いなあ」「こんなサッカー、俺だったら楽しくないなあ」などと思いつながら一緒にサッカーをして遊んでいた。

その時、キラリとひらめいたことがあった。

今考えればキラリでもピカリでも何でもないのでが、とにかく、その時はキラリとひらめいたのだ。

「もしかして、この場所と、子どもたちのもつている力と、子どもたちが楽しいと感じる程度と、このサッカーボールが、マッチしていないのではない

か？」

ということだった。僕はおもむろに保育室に戻り、新聞紙を丸めてスーパリーの袋に詰め、直径三十センチメートル程のボールを作った。あまりに殺風景だったので、黒いガムテープでサッカーボールの様な模様を付けた。即席ミニサッカーボールのできあがりだ。できたけれども、正直みすばらしかったし、子どもたちには受け入れられないと思っていた。

ところが、ボールを交換することを提案し、いざやってみると、サッカーは大盛り上がり！ みんな一心にボールを追いかけて、熱中していた。何かが変わった。

「よくわからないけど、何かが変わったから、こんなに楽しくなったんだ」と感じた。

新聞で作ったボールは弾まない。そして転がらな

い。また、柔らかい。そのことと、子どもたちの力が丁度良いバランスになり、中央テラスという狭い場所でのサッカーを面白くしたので。

つまり、ボールが弾まないということは、蹴ったボールがすぐ側でまた止まるということだ。そうすると、子どもの足の速さでもすぐに追いつくことができ、またボールに触れる。それは狭い空間でもボールを自分たちのものとしてコントロールできるということだ。そのことが面白さにつながったのだと思う。実際、戸外で行うサッカーも、サッカーとして楽しんでいる時間と、遠くに転がったボールを拾いに行っている時間とどっちが長いかわからないような場面もある。

「本当のサッカーボールを使うだけがサッカーじゃないんだな」
そう感じた。

それ以来、雨が降った日のサッカーは中央テラス

で新聞ボールを使う、ということが子どもたちの中の常識となっていた。

まだ新米だった僕は、あまり深く考えずに感覚的にこのような行動に出たのだが、先輩の先生方にこのことをきちんと振り返る機会を頂いた。そのことは、サッカーに限らず、「その時その時の子どもたちの楽しみ方や発達段階に合った素材や道具の提示、また環境の構成、場所の設定」というものが何なのかを考えるきっかけとなった。

雨が降るのも結構悪くない。

とはいえ、やっぱり晴れが好きなのは、晴れることを願ってやまないのだが、先日と同じように雨が降ったことで、子どもたちの育ちを再確認することができた。

五歳児の三学期、毎日のように二クラスの年長児が入り乱れてドッジボールを楽しんでいた。その日も「生憎の」雨だった。これまた自然と、中央テラスでドッジボールが始まった。そこでのルールの設定の仕方が子どもならではで、教師は唸らされた。

中央テラスは狭いので、おそらく力いっぱい投げればすぐに当たってしまうのだろう。内野にいる幼児は「二回」当たると外に出るというルールができあがっていた。同様に外野も「二回」当てなければ中に入れないらしい。そして更に驚いたのは、中央テラスの屋根の丁度半分のラインで雨どいがついているのだが、その位置をセンターラインにして遊んでいるのだ。見えない線を、在る物として遊んでいる。これには驚いた。

雨が降ることで遊ぶ環境が変わり、教師がそれに合った素材や遊び方を提示することも必要だが、こ

こではそれを子どもたちが自分で行っていたのだ。もうそこまでできていたか、そう感じ、この仲間でもあったな、今までやってきたことも無駄ではなかったなと、再確認できた一日になった。

雨に感謝。

子どもたちの楽しさの追求は大人が思う以上に妥協を許さない。晴れば晴れたなりの、雨が降れば降ったなりの環境の中で、一番面白いことは何なのか、それを知っているのは大人ではなく、子どもなのだと思う。それを最大限引き出して、一緒に楽しみを共有できるような保育者になりたいなあ、と思ったのである。

これまた、雨に感謝。

(東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎)

雨の中に昨日が見える、明日が見える

菊地 知子

雨の日に、見えぬものへの想いを深くするのは、一人大人に限るものではないだろう。空から連続して降りる透明なカーテンによって、外の世界から隔絶された場所に身を置いているかのような身体感覚は、見知った世界をも物理的な距離以上に遠く感じさせ、それゆえ子どもはしみじみと、

「○○ちゃんは どうしているかなあ」

などと独り言ちてみたりするのだろう。それと同時に

に、晴れた日に身躯を伸びやかに広げて遊んだ記憶を、再び引き出し、形を違え、意味を変えて深めていく様子も、雨の日の遊びに多く見られるように思う。

八年ほど前の記憶である。我が家のY子は二歳になると、三歳上の兄Kを幼稚園へ送る朝に目を輝かせて言うのだった。

「Y、こーんなに大きくなったから、先生今日は、『どうぞ』って言うね」。

ずいぶん大きくなったのだから、もういい加減、Yちゃんも幼稚園に来てもいいですよ、と、先生が言ってくれるだろうとYは信じて待っている。入園までは早くともあと一年、一歳からようやく二歳になったのよりもたくさん時間がかかるのだ、ということも歯切れの悪い言葉で説明するも、あしたもあさつても一か月先も「あした」であるYに対しては、どうやらあまり説得力がないようだ。私は不必要に同情することはやめて、行かせられないのなら来てもらえばいいじゃないかと、家庭保育をコーディネートする機関に会員登録をし、有償ボランティアという名目で、子どもの預かりを始めた。今でいうファミリーサポートの走りである。先駆的な自治体がちらほらと、そこに教えを乞うて、自前のファミリーサポート事業に取り組み始めた頃である。下校後・降園後には、小学生の娘の友人、幼稚園児の息子の友人、そしてしばしばその親たちまで巻き込んで、ただでさえ子どもの出入りの多い我が

家は、さながら小さな児童館併設保育園といった風を呈し始めた。

H子とE子は、ある時期週に三、四回我が家に来ていた年子の姉妹である。娘のY子とはH子が五か月、E子が十か月程の月齢差であった。三歳になりたてのH子、二歳後半のY子、もうすぐ二歳のE子の三人を団子状に連ねて、やれ公園だ、Kのお迎えだ、と出かけたわが身を思い出すたびに、よくやっていたものだと感心もしあきれもする。雨ともなれば、Kのお迎えに出るためだけでも、E子を紐でおぶった上からレインコートを着、H子とY子にレインコートを着せて長靴をはかせ、二人に手をつながせてどちらか一人と私とが手をつなぎ、もう一方の手で傘を持って家を出た。われながらなかなかの勇姿である。H子とE子には、当時四歳の兄もおり、その母親が少し以前を振り返って「零、一、二歳の三人を連れて歩くのは、『移動』というよりは『運搬』という感じだった」と言っていたが、さもあり

なんと得心がいった。

ある朝、Y子と私はいつものようにH子とE子とを待っていた。その日はずっと雨降り、Kを見送り、H子とE子が来るときの常で、いそいそと家に戻ってきたY子は、予定の九時半になってもなかなか現れない二人を、

「Hちゃんたち、もうくるかなー」「あめこんこんでこないかなー」

と、遠いものを思う表情になって待っている。十時過ぎにドンドンと玄関の扉を叩く音がするのでY子と二人玄関に出てドアを開けると、大きな黄色いレインコートを着、開いたままの濡れた傘を持ってH子が立っている。右と左とでレインコートの裾の長さが違うのは、上から一つ目の穴と二つ目のボタンとを組み合わせた結果らしい。小さな人が、レインコートに小さな傘、長靴といった装束に身を包んで雨に立ち向かうべく佇むさまには、その潔さ故だろうか、目にするたび心打たれてしまう。

程なく、父親に抱かれたE子も現れ、

子どもたち三人は、地面を踏み鳴らすように両足でドスドス跳びはねて、今日も一日遊べる喜びをしかと確認し合う。H子は、長靴も脱がぬうちに玄関先で、話しておきたいことがある、と

でも言いたげなまっすぐなまなざしを私に向け、

「ひーちゃん、あめだから、自分でかささして、ゆきー、おかあさーん、ってきたの」

と言う（H子は母親をママと呼び、我が家に来ると私のことを、娘のY子が呼ぶように「おかあさん」と呼んでいた）。この場所に至るまでの彼女の姿を思うと愛しくて、

「そう。ひーちゃん、あめだから自分でかささして、ゆきー、おかあさーん、ってきたくれたのね」とH子のことばを繰り返す。H子は大きく頷いて、ブンブンと足で振り払うように長靴を脱ぎ、部屋の中に入ると、いつもの元気で遊び始めた。H子は



かばんに、お気に入りのハムスターのぬいぐるみを入れてきていた。ハムスターはさっそく、我が家のウサギやクマとささやき声で会話を始める。Y子もE子も「何やつてるの？」などと無粋なことは問うこともせず、ままごとの器に積み木を入れた「食事」を甲斐甲斐しく運んだり、ハムスターたちの寝場所を整えたり、他の人形も連れてきて会話に加わったりする。六畳の狭い部屋の中では、たちどころに、生き生きと、また安定感のある確かなごっこ遊びが展開するのだった。

ややあつてふと見ると、H子が、六畳間に続く台所のテーブルの下にうずくまっている。首を少しだけ起こしてかすかにフルフルと振ってみたりするの、私には思い当たることがあり、自分も床に座つて、

「あら？ そんなところに居るのは、井の頭公園のモルモットさんかなあ」

と言つてみた。H子はこちらを見て声を出さずに二

度頷く。

「それじゃ、おひざに抱っこしよう」

と言つて私は、H子の丸めたお尻と胸のあたりを包み込むように持ち上げてひざに乗せ、

「かわいい、かわいい」

と背中をなでた。今、自らが小さなモルモットになつて私のひざの上で丸まっているH子は、十日ほど前の晴れた日に訪れた、大きな公園へと思いを馳せているようだった。その公園の小動物コーナーで、順番を待つ列に何度も走つて行つて並んでは、愛しそうにモルモットをそのひざに抱いていた。

モルモットのH子は、ひざの上で私を見上げて床を指差し、元の居場所に戻せと示す。テーブル下の隅にH子を置くと、モルモットはすぐさま三匹に増えた。抱き手は列に並ぶまでも無く、大忙しで順番に膝に抱いては、

「かわいいかわいい」

と背中をなでた。けれどもじきに三匹は、まさに

じゃれ合うように自分たちで遊び始め、私はこれ幸
いとはかりに床から立ち上がって、昼ごはんの支度
に取り掛かった。

私が食事やおやつ準備を始めるときの常で、H
子はいち早くその気配に気づき、

「ひーちゃんも！」

と言って戸棚の引き出し（無論、我が家の、であ
る）から子ども用のエプロン（無論、我が家の、で
ある）を出して首にかけた。肌寒の雨の日だから
と、温かいうどんを作る。まな板ににんじんをしつ
かりと固定し、ピーラーで皮を引く作業は、三人が
三人とも、是が非でもやりたいことである。あれや
これやと揉めつつも、つつがなくになんじんの皮はむ
かれ、他の食材と共に鍋で煮込まれて、その間、お
気入りの手遊びの二回も歌って待てば、あったか
うどんのできあがりである。もちろんこんなとき
は、出てくる歌詞の「そば」は「うどん」に変えて
歌う。

E子を子ども用の椅子に座らせてできたうどんを
腕につき、四つテーブルに並べると、E子が左右に
からだを揺らして「らいらいらてー」と言う。E子
流の「らいっしやいませー」である。

このことを初めてE子の口から聞いたのは、公
園で遊んでいたときだった。砂場で使うままと道
具を、袋からザッと一気に出したが、E子の意志
とは無関係にH子やY子によってひとつまたひとつ
と持ち去られ、目の前からなくなりかけていたと
き、E子は左右からだを揺らしながら「らいらい
らせー」と言って、「売り子」に転じ、積極的に持ち
去られることを喜ぶ遊びに変えたのだった。この一
歳の子の知恵に、そのとき私は心底感心し、E子に
弟子入りするように、「らいっしやいませー」と、
一緒にままと道具を売りさばいたのだった。

「うどん屋さん、おうどんください」

と私は、今回はお客になってお金を払う真似をし
て、うどんの腕をひとつ、自分の前に置いた。果た

せるかな日子もY子も、E子にお金を払う真似をして、それぞれうどんを自分の方に寄せた。本当にいつもの日常使いの、何の変哲も無い茶色いテーブルでうどんをすすりながら、気分は充分「おでかけ先でのお食事」だった。

帰り際、迎えにきた父親を見上げて日子が「ひーちゃん、今度また公園行くの」と言った。私はそれを嬉しい気持ちで聞いた。保育中、「今度また公園に行つてモルモット抱っこしようね」などと子どもたちと言ひ合つたりはしていない。けれども、否、だからこそ、気持ちを受け止め合えたことが嬉しく、「そうですとも。了解了解」と心中思ふ。保護者へ宛てた連絡ノートには、『テーブルの下にもぐつて、モルモットになつて遊びました。お昼はEちゃんのうどん屋さんで食べました』と記しておいた。すべてをくまなく伝えることはできないが、日子の一言がまるで総括となつて、今日という一日についての理解を、大人たちに共通のものとしてくれ

るだろう。

この日テーブルの下で展開した、雨に音をかき消されたままのような静かな遊びも、幼い子どももの拙い物言ひから展開した遊びも、晴れた日の戸外での経験にしっかりと支えられていた。支えられていたのみならず、これから先の晴れの日を、別なタッチで必ずや彩つていく。

子どもと共に過ごす雨の日には、目前には居ない旧知に思いを馳せる子どもの心、今とは違う明日へと希望をもつて移つていく子どもの姿が、いつになりに形を伴つて私たちの前に立ち現れることがある。雨は、戸外での身動きを困難にさせ、室内での不自由を余儀なくさせる。しかし、雨の日もまた豊かに生きようとする子どもと、またその同行者によつて、慈雨となり、心の大地にゆつくりとしみ込み、大地を豊かな大地たらしめる水脈となつて、人もも成長させてくれるのだろう。

(千葉県 ひだまり文庫)

雨の日こそ園庭へ

當銀 玲子

雨の日は嫌い？

皆さんは、雨の日は好きですか？ 天気には、晴れの日もあれば、曇りの日も雨の日も雪の日もあります。いろいろな日があるから変化があつて面白いです。でも、天気予報で「今日は雨」とわかると、がっかりするのはなぜでしょう。これは多分、予定外の準備をしなくてはならないからではないでしょうか。保育者にとって雨は想定外であることが多いのです。

そういえば私も、日々の指導計画を立てるとき、雨が降ることを考えずに立てることがほとんどでした。梅雨の季節や研究授業などで雨が降りそうな場合は「雨天の場合」という指導案を作成しますが、まず普段ではありえません。ですから、雨の日の指導案は、本当は戸外での活動を取り入れたいのに雨が降っているのです。仕方なく室内だけで過ごす代替案なのです。さすがに、梅雨の季節は、雨を想定した指導案が作られ、保育者は室内遊びを充実させることに力を注ぎます。子どもたちも、その室内環

境の中で、しばらくはそれなりに遊ぶのですが、やはり雨の日が続くムシムシする室内での遊びが続くと、エネルギーをもてあまし始めます。そして、保育者も子どもたちも「雨さえ降っていなければ、戸外で思いっきり遊べるのに……」という思いが湧いてくるのは当然のことです。だから「雨の日は嫌だな」と思うわけです。

雨の日はどこで遊びますか？

ところで、雨が降ったら室内で過ごさなくてはいけないなんて、保育にそんな決まりはあるのでしょうか。何故かそのように思い込んでいる保育者が多くありませんか？ 実は、私もその一人で、少し前までは、雨が降ったら室内で、如何に子どもたちのエネルギーを発散させながら、楽しく過ごすかをいつも考えていました。

ところが、最近になって、私の中の常識が破られました。それは、昨年度、ある幼稚園で数日間研修

生として過ごしたときのことです。そのときの研修のテーマは「園庭環境」ということで、とても天気が気になりました。ところが、不運にも雨続き、その上、台風もきてしまいました。私が朝の打ち合わせで「今日は雨ですね……」と落胆して言うと、担任の先生方は「うちのクラスの○○君たちと○○ちゃんたちは外へ行くでしょう」。別の担任の先生も「うちも○○ちゃんたちと○○君たちも外に出ると思いますよ」と言うので、私は驚きました。「先生、よかつたら幼稚園の長靴を貸してあげますよ」と言われ長靴を手にしたものの、この日は台風がくる前だから、風はそれほど強くはないけれど、雨は勢いよく降っているので、「こんな雨の日に園庭で遊ぶ子がいるのかしら」と半信半疑の思いで子どもたちを迎えました。

雨の日に園庭で遊ぶ子どもたち！

私の常識の中では、雨の日は休みが多く、まして

や台風が近づいてくるわけですから、「今日はお休みが多いのでは……」と思っていたところ、休む子どもはいません（雨が降って休みたいのは、大人です）。そして、気がつくといつの間にか、園庭に色とりどりのレインコートを着て、長靴を履いて、傘を差して、歩いている子どもたちがいるではありませんか。私もつられて、黄色い大きな長靴を履いて、園庭に出てみました。

雨水のたまっている芝の上は「ビシャツ、ビシャツ」と音がして懐かしい感覚がします。池のところにいくと水面に落ちる雨粒が模様を描いています。築山の麓の土管の入り口には水たまりができて、洞窟をイメージさせます。傘を閉じて入っていると、奥は水たまりが無く乾いていて、しばらく雨宿りをしながらいろいろな話をしました。それから築山の山頂へ滑らないように気をつけながら登り、山頂に立つと、また強い雨が傘にぶつかり、バチバチ音がします。「キヤーキヤー」言いながら、

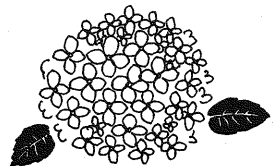
山を降り、また土管の中へ……。子どもたちは「雨が降っているから部屋で遊ぼう」ではなく「雨が降っているから外に行く」の発想をもっていました。

「雨の日の園庭は面白い」ということを、この子どもたちは知っています。

別のチームは、いつも自分たちがサッカーをしている場所へ行きます。そこはとても大きな水たまりで、最初は恐る恐る小さな長靴で入っていくのですが、次第に「海みたいだ」とずんずん深いほうへ進んでいきます。歩くと波が立ち「そんなにジャブジャブしたら長靴に水が入るのに……」なんて心配するのは大人だけです。そのようなことは気にせず、子どもたちはワクワク探検に出掛けるのです。

雨の日ならではの発見！

私は最近、山を歩きます。それも同じところによ



く行くのですが、晴れているときと雨のときとはまったく様子が違います。雨の降り始めは、静かだった林がざわざわします。大雨が降ると、いつもは雪解け水できれいな川が、川幅が広がりカフェ色をした水が、怒涛のごとく流れます。そして道の真ん中を大きなカタツムリがゆっくり移動していきます。同じ道なのに、雨が降るといつもとは違う景色が見られることがわかってから、雨の日も楽しいと思えるようになりました。

この幼稚園の子どもたちも、雨の日の楽しさを知っているでしょう。水たまりができる場所、雨宿りできる場所、雨粒模様が見える場所、つるつる滑る場所など。そういえば、雨の日に一人の男の子が、自分たちの小さな畑に案内してくれました。野菜の葉には雨粒がコロコロしていて、ラディッシュは雨に濡れて赤く色鮮やかに光っていました。そのような畑の様子を数人の子どもたちとおしゃべりしながらしばらく見ていました。

雨上がりの園庭

さて、いろいろな事情があつて、雨が降っているときは園庭に出られないという方でも、がっかりせずに、雨上がりに園庭に出てみてください。雨上がりの園庭でも、楽しい経験はたくさんできます。

雨上がりのジャングルジムや鉄棒などの手すりには、水滴がいっぱい付いています。日が差しているとてもきれいです。そのようなとき、子どもたちはブリンの空き容器などで雨粒を集めます。先生方の中には、滑ると危ないのですぐに拭いてしまう場合もありますが、ちよつと待って、光る雨粒を楽しんでから、子どもたちと一緒に拭くと、よいのではないのでしょうか。

ブランコの下にもよく水たまりができますが、すぐに埋めてしまわずに、様子を見てみてください。子どもたちはブランコに乗るには、どうしたらいいかな？ と考えます。横に回って鎖をつかみ、板を

引き寄せて飛び乗り、立ちごぎをします。そのうち砂場から砂を持ってきて、みんなで水たまり埋めを始めます。埋まったかなと思つて土をたたくと、また水がしみてきます。湿っている土の上で足踏みをしていると地面から水が出てきて、子どもたちと「不思議だね」と言いながら作業をします。

私の所属した幼稚園のいくつかは、水たまりができる子どもたちが「濡れないように」「滑らないように」と、すぐに埋めてしまうか、立ち入り禁止のラインを引いてしまいます。でも梅雨のある日、私は水たまりをそのままにしておきました。子どもたちは予想通り、入っていききました。躊躇いながらもそつと入る子、ビシャビシャ入る子、その様子を園長先生と陰から見っていました。子どもたちには経験できなそうです。そして、都会の子どもたちには経験できない水たまりでの遊びをさせてあげようということになり、水たまりをそのままにしておくことになりました。その後、水たまりは次第に深くな

り、梅雨の間、子どもたちの楽しい遊び場となりました。

雨も大切な保育環境

雨は自然の贈り物です。雨の日に室内に充実した環境を準備して過ごすことは大切なことです。でも「雨の日こそ園庭へ出てみる」ということも、考えてみてはいかがでしょうか。今、子どもたちは、雨が降ると車に乗って濡れずに幼稚園へきます。長靴をもっていない子もいます。もちろん道に水たまりなんてありません。このような生活環境の子どもたちのために、雨が降らなければできない経験を、ぜひ考えてみてはいかがでしょうか。まずは、雨の日子どもたちと園庭に出てみて、一緒にいろいろな発見や体験をして、雨の日の園庭の面白さに気づいてほしいと思います。そして、雨を自然環境として保育に生かしてほしいと思います。

(浦安市教育委員会)

しゅんちゃんのお雨の日

川崎 徳子

朝、雨が降っていると、なんとなくお天気の良い日に比べると気分が晴れない気がします。外がどんより暗いからなのか、雨の音が耳に響くからなのか、それとも太陽の光が感じられないからか、動きが制約されてしまうからなのか、どこかそんな気分

になっていく気がします。「雨の日だって楽しもう」とか「雨の日も好き」ということも、保育者である私は考えてはみるのだけれど、やはり、雨の日の霏霏を味わうには、少し気持ちの切り替えが必要で、いつの頃からか「雨の日」というイメージが自

分の中に大きくできてしまっているようだなとも思えます。それは、雨の日を感じていることでもありますが、本当はもっと楽しめる雨の日を少しづつまらなくしているのかもしれない。

この年は四歳児の担任でした。私の勤めている園では、三歳から進級する子どもと四歳で入園している子どもが一緒になって四歳児のクラスになります。その子どもたちが新しい友達や生活にも少し慣れてきて、自分なりに好きな遊びを見つけて動ける

よくなる頃、季節はいいタイミング(?)で梅雨を迎えます。ちょっと気に入った遊具やウサギ小屋、保育室周辺の庭を回って花を摘んだりダンゴムシを見つけたり、砂場の周りでままごとをしたりなど、自分なりに、あるいは保育者の側で、したいことを見つけて過ごすようになってるのに、雨の日が続くとそれが思うようにいなくなってしまう。

それだけでなくまだまだぶつかることの多い子どもたちです。雨が降ると外に出られないものだから、保育室に居る子どもの数も多くなり、ぶつからなくても良いところでぶつかったり引つかからなくていいところで引つかかってしまいます。そのため、喧嘩が起こったり悲しい思いをすることも増えたりしてしまふのではないかと、そんなことが雨の日の保育の心配事として浮かんできます。そうこう思いを巡らせながらも、なんとか楽しく過ごせるように、保育者は環境を考えていくのですが……。

でも、ふと目の前の子どもたちの姿を追ってみる

と、いろいろなお天気の日や園の環境、そして、毎日の生活をそれぞれに受け入れて自分なりに過ごしていくようになっていく様子が見えてきました。そして、感動しています。そんな雨の日を巡る子どもたちの姿からいくつか書いてみました。

雨の日の過ごし方 その1

園庭の乗り物に、三輪車があります。小さい三輪車、少し大きい三輪車、色違いのものや二人乗りのもの、つながるものなど、いくつか種類があるのですが、その中でも特にどの年齢の子どもにも人気のある赤い三輪車があります。確かに、私が乗ってみても一番ペダルとタイヤの関係がいい感じで、ペダルを踏み込むと力がうまくタイヤに伝わって適度にスピードもでるし、漕いでいて何よりも爽快です。四歳児のようちゃんも一学期の頃は、とにかく朝来るとそれを探して乗ることが続きました。

そんな頃の雨の日。小降りだけれど雨粒が落ちて

いたのに、ふと私が裏庭を見ると、ようちゃんが赤い自転車に乗っていました。何か感じながらゆっくりペダルを踏みしめて……。見ている私には気づいていなかったのだけど、「ようちゃん濡れるから、雨ひどくなったら入っておいで」と声を掛けると、じっと私を見つめた後、だまっただまま、またペダルを踏んで広い庭の方に進んでいきました。暫くすると、ちよつと雨がひどくなってきたので、気になって外を見ると、赤い三輪車は裏庭に乗り捨ててあり、ようちゃんは、保育室で絵本を見ていました。

この頃のようちゃんにとつて、三輪車は、幼稚園ですることの一つであつて、ルーティーンという程のものになっていたわけではないのかもしれないけれど、ようちゃんその日のリズムをつくるものになつていたのかもしれない。それは雨が降つていても、したいことの一つであることには変わりはなく、やはり乗らずにはいられなかったのだと思えます。でも、雨がひどくなると、きつと何か感じて、

乗り続けなくて部屋に入ってきたのだろうとも思いますが。大雨だったらもう少し声を掛けたかなと思うけれど、保育室で絵本を見ているようちゃんを見ると、そつとしておいてもいいかなと思えました。

雨の日の過ごし方 その2

私の居る園は、保育室が中庭を囲んでいるような構造になつているので、少しの雨なら砂場のある中庭でも遊べるように稼働式のテントを出します。でも大雨になるとそれもできない。それでも、子どもたちは、雨の日も園庭のあちらこちらにある雨を避けられる場所をしつかりと知つていて、傘をさしたりカッパを着たりして出かけていきます。必ず出かけているところが、赤い汽車と客車の遊具。中に入れるので、少しの雨でもままごとやごっこができます。汽車の入り口には、ちゃんと傘がたたんでおいてあるのもすてきな風景。

もう一つは、園庭でもちよつと離れたところにあ

るアスレチックの三角の塔の下。ここは、雨が完全に避けられるわけではないけれど、家のイメージがもてるのでしよう。雨でもままごとをしたい子どもは、せつせと鍋や皿を運んでやっています。

それから、築山に埋めてある土管の中。土管は二つあるのですが、その中にも二、三人から多いときは四、五人の子どもたちが居ます。ここは、夏は涼しくて、土管のカーブにもたれかかるとお昼寝もできるくらいいい感じ。友達とそつと頭を寄せ合ったり体をくつつけたりしておしゃべりしている姿もほほえましく、日よけにも雨よけにも、居場所にもなるみたいです。

さすがにどしゃぶりだと、どの場所も空っぽになるけれど、雨でも楽しめる場所をちゃんと子どもたちは見つけて過ごしています。

雨の日の過ごし方 その3

保育室の前のテラスの屋根から、雨の日は雫が落

ちてきます。子どもたちもはじめのうちには、じつと眺めているけれど、そのうち手で触って、いつの間にか頭も濡らして、雨シャワーに。友達とキヤーキヤーはしゃいでいる声を聞きつけて、「風邪ひいちゃうよ」と声を掛ける私。どうしても、最後はこうなってしまう。

タオルで頭を拭きながら、目が合うその表情からは、「わかつてるよ」って、伝えられてる気がするけれど、どうかしら？ こんなことは毎年繰り返されます。

そんな側では、雨の雫からか、水たまりからか、足洗いの桶にたまっている水を見たからか、色水を始める子どもたち。水が何を連想させたのでしょうか？「お部屋には、その色水持って入らないでね」と伝えながらテラスに机を出して場をつくる私。雨の日にも水遊び、雨の日だから水遊びなのかなとふと思います。



雨は濡れることばかりでもありません。四歳児は、自分のロッカーに個人持ちで粘土を持っていくのですが、雨が降ると自分の粘土と粘土板を持ち出して始める子どもたちもいます。一人二人が始めると、いつの間にか何人かと一緒に楽しんでいきます。

そして、その向こう側では、思い出したように棚の上の籠にしまっていた楽器を取り出してきて、「ねえ、先生曲かけて」という子どもたち。さっそくCDデッキを出して場をつくります。すると、それぞれが思い思いの楽器を手に、曲に合わせて大合奏に大合奏。いつの間にか人数も増えています。雨の日でみんなが側にいることで思いついたり思い出したりする遊びや広がる活動もあるなと思います。

そして、最後は、しゅんちゃんの日

四歳の四月、他の園から入園してきたしゅんちゃんは、お母さんが出産を控えていて入園当初から休みも多く、なかなか園の生活にも慣れないでいまし

た。毎日どんな風に過ごしているかわからず、ひとつひとつ私に「これはこうしていいか？ どうするか？」と確かめて過ごすことが続いていました。そうした中でも生き物にはとても興味があって、保育者と一緒に飼育ケースを持って外へ出かけることが楽しみになっていました。登園すると、すぐに虫捕りに出かけるようになっていました。私は子どもたちの朝の受け止めをしていて、すぐにしゅんちゃんの子供捕りについて行けないことも多かったのですが、そのときは副担任のN先生を誘って出かけたり、そのうち、朝シールを貼るとすぐに、「外に行っていいか？」と私に声を掛け、自分だけでも出かけたりのようになってきました。その頃は、園庭にはバッタやテントウムシがたくさんいて、いつの間にか生き物の好きな友達二、三人と一緒にあって一日中園庭を探し回り、飼育ケースにいったい虫を捕まえて帰ってくるということが続きました。

そんな頃のある日。その日は、雨がザーザー降っ

ていました。いつものようにしゅんちゃん、飼育ケースを持って、お出かけの準備。カッパもしっかり着ています。「しゅんちゃん、雨、降ってるよ」と私が声を掛けると、「カッパ着ていけばいいじゃん」とあっさり返事を返し、雨の中を出かけて行きました。雨だから特別という訳ではなく、いつもと変わらないという顔でした。そして、今日もいっぱい虫を捕まえてくると言っているようにも見えました。声を掛けた私の中には、「濡れるよ」という気持ちと同時に、雨の日だからいつものように虫はいないと思うけど……という気持ちが無意識に含まれていたのかなと思うのですが、こうもあっさりしゅんちゃんに返されてしまったことで、私自身、何かちょっと恥ずかしいような気持ちになりました。そして、その日のしゅんちゃんは、いつものように虫をどっさり捕まえてはいなかったけれど、その代わりにカタツムリを一匹飼育ケースに入れて帰ってきました。「カタツムリがおった」と、それ

で十分満足そうでした。

そんな調子で雨の日も関係なく飼育ケースを持って出かけていたしゅんちゃんの毎日も、気がつくど、いつしか無くなっていました。朝から手には広告で作った剣を持ち、カラービニール袋のマントを着けているしゅんちゃん。いつの間にか生き物から始まった幼稚園での生活が、好きなキャラクターになりきって友達と一緒に過ごすことへ移っていたのです。

四歳の生活を随分と過ごした一月のある雨の日の朝。久しぶりにカッパを着て飼育ケースを持って出かけようとしているしゅんちゃんを見かけました。私に気がついたしゅんちゃんは、「ちょっとカタツムリ捕ってくるけー」と、一人で雨の中に出かけて行きました。そして、片付けの頃、「メダカ捕ってきた」と見せてくれた飼育ケースの中には、赤いボウフラがフニョフニョ泳いでいました。「先生、これ飼うからここに置いちゃくね」。

雨の日に「カタツムリを捕ってくる」と言って飼育ケースを持って出かけたことも、始めの頃のしゅんちゃんからすると変わってきているのですが……。きつと散々園庭を回ったことでしょう。もしかしたら、池に行ったのは、アメンボを捕ったときのことを思い出したからかもしれません。この寒い季節には、そんな生き物も普通はいないのですが、しゅんちゃんの熱心な散策は、こんな季節の雨の日でもボウフラという立派な生き物を見つけることに至ったのです！ それはそれで、ステキなこと。また次に雨の日に気づいたら、今度はボウフラ探しに行くのかしら？

雨の日が雨の日になること、雨の日を感じて過ごすこと。四歳児の一年の中で、雨の日を追っても子どもたちの過ごしている世界の広がりを感じます。そして、確実に自分なりに育っていることも。それから、しゅんちゃんの姿を思うと、大人が先に「こ

うなのよ」と言ってしまふよりも子どもたちは、雨の日のことをそのときそのとき感じながら、重ねて過ごしているんだなと思います。もちろん、側にいる大人として、子どもたちに気づいて欲しいことは伝えても、粹のない空間、ほんやりとしていてもとても広い空間の中にいて、いろいろなことを感じている子どもたちの世界は大切にしたいなと思います。そして、私たち大人は、確かさの中にいるように、実は限られた世界で生きてしまっているかもしれないことを自分の中で思い返しながら……。

「ねえ、先生、さつきよりお日さま元気になったね」「そうだね」。

雨あがりには園庭に出かけようと一緒に靴を履き替えながら、こんな風に話せる子どもたちとの生活が今日も続いています。私の中の雨の日も、今年はおう少し違ってくるかもしれません。

(山口大学教育学部附属幼稚園)

子どもたちの学び

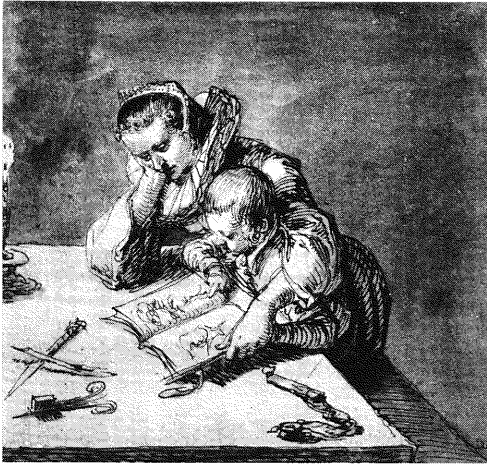
—十七世紀オランダ絵画が伝える教育の姿—

小林 頼子

教育を語るとき、オランダ語では二つの言葉を使い分ける。一つは、身体を育て、しつけをする *opvoeding* (動詞形は *opvoeden*)、もう一つは、知的な教育を授ける *onderwijs* (動詞形は *onderwijzen*) である。幼児の保育には前者、中等教育あたりから上の教育には後者が使

われる。初等教育は、両方の要素を兼ね備えているためか、話の内容によりどちらかの言葉が選択されるようだ。今回は、その二つの局面のうち、初等教育開始前後から施される *onderwijs* の状況を絵画のなかに探ってみたいと思う。

ジャック・デ・ヘインⅡ世の素描（一六〇〇）（図1）にも明らかなように、十七世紀オランダでは、幼い子どもも勉強の相手はまずは家庭を守る者・母親の仕事とみなされていた。机の前に座り、頬杖をつき、子どもの背中にやさしく左腕を回す若い母。子どもの繰る冊子の右頁には木、左頁には牛が見える。二人は画家の妻と息子。机の上にあるのは画家のペンとペンケース。とすれ

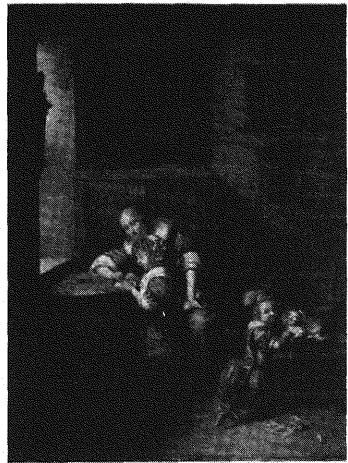


1 ジャック・デ・ヘインⅡ世《母と子》、
1600年頃、素描、ベルリン、国立版画収集室

ば、彼らが見入っているのは父親お手製の絵本とでも呼ぶべきものになる。最初の挿絵入り教育読本がコメニウス（一五九二—一六七〇）によって刊行されるのはようやく一六五八年のことだが、デ・ヘインの家族は、その雛形ともいえるべきものを勞せずして手に入れ、利用できたのである。ちなみに、画面左端の机上に灯るロウソクは、すでに日が落ちた後の静かな学びの時間をほのめかすとともに、闇に灯る英知、つまりは教育の力の徴ともなっている。いまでもよく見かけるこうした母と子の学びの情景に、さらに一歩踏み込んで、素質、教育、訓練という、古代・ルネサンス時代に遡る学習の二つのプロセスを読み取る研究者もいる。その場合、母はすべてを導く本性を体現することになる¹¹⁾。

幼児教育における母親の役割は、カスパル・ネツチエルの作品（図2）にも明らかだ。窓辺の机で熱心に母に読み書きを教わる幼い女兒。窓から差し込む光は、デ・ヘイン作品のロウソクの光——英知の光——の代わりと見ていい。彼女の後方には、母に背を向け、犬と戯れる男

児。傍らの床の上には、彼の遊び道具である色刷りの絵、骨お手玉、独楽がころがっている。外からの力が加わらなければ、止まっている独楽は静止したままだし、回っている独楽もやがて動きを止める。母が働きかけて教育してこそ、子どもは色刷りの絵を読本に代え、お手玉をやめ、よき道へと導かれる。それを拒めば怠惰の道に堕ちるほかない。学んでいる女兒の上に画中画《モーセの青銅の蛇》、相変わらず遊び続ける男児の上に地獄が掛かっているのは偶然ではない。前者はキリスト磔刑の予型として聖なる世界を、後者ははかなく潰える世俗



2 ネッチェル《母の教え》1669年頃
ロンドン、ナショナル・ギャラリー

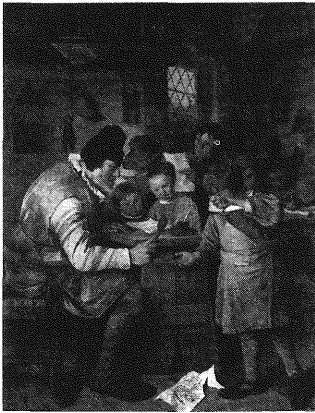
の世界をほのめかす²⁾。人は学習を通じて真理に行きつき、怠惰ゆえに七つの大罪の一つを犯すのである。

十七世紀当時のオランダでは、三十二パーセントの女性に書字能力があったと推測されている。読む能力だけを考えれば、この数字はさらに飛躍的に大きくなる。

デ・ヘイン、ネッチェルが描いたのは、服装から見て、中より上の層の女性、つまり子どもに読み書きを教えるくらいなら苦もない母親たちと見ていい。とはいえ、親の力の及ぶのは子どもが幼いうちのこと。ある程度以上の年齢になれば、子どもの教育は専門の教育機関である学校に任さざるをえなくなる。ちなみに、十七世紀オランダでは、五―十四歳までの子どもの就学率はなんと六十五パーセント。この数字は、他のヨーロッパ諸国に比べ相当に高い。プロテスタントを信仰する国として、「神の言葉にかえる」こと、すなわち聖書に書かれた言葉の重要性を重視していたため、どうあっても信徒には読み書きの基本を教えておかねばならなかったのである。商業国で生き抜くため、日々の暮らしの中で、帳簿

や契約書を確認しなければならなかったことも、その状況に拍車をかけたことだろう。オランダで初等教育が義務化されるのはようやく一九〇〇年になってからだが、そんな事情を抱えていたせいも、オランダ共和国が成立した十六世紀末頃には早くも全土に初等教育を授ける学校が設けられていた。³⁾

その初等教育の様子をヤン・ステーンの《村の学校》(図3)に見てみよう。そう広くもない部屋の壁に、ランプ入れ、砂時計、水(ワイン?)、差しが掛けてあり、ニツチには液体の入ったフラスコと瓶、上方の棚には数



3 ヤン・ステーン《村の学校》、
1663-65年頃、ダブリン、アイル
ランド国立美術館

冊の本、紙の束が置いてある。ランプ入れは子どもたちがカバン代わりに使っていたもの、本は教師の常備品、紙は生徒に配布するものなのだろう。どうやら、教師の自宅が、ひととき、学校に姿を変えたようである。黒い帽子をかぶり、こわそうな顔をした先生は、子どもたちが並ぶ机の前に斜めに座っている。彼は、右手に持った木製ヘラで前に立つ少年の右の掌をしたたか打っているところらしい。体罰を食らった少年は、左手で涙をぬぐい、ペソをかいている。原因は、破けて、二人の間に打ち捨てられている紙にある。少年は、課題もせずにはじきずら書きをし、挙句の果てにもらった紙を破いてしまった。あるいは課題はこなしたものの、できが悪かったのか、いい加減だったのか。いずれにしろ、教師のお気に召さなかったことだけは確かだ。机の向こうでは、同じ体罰が待っているのをおそれるか、自分は何とかパスできると踏んでいるのか、何とも複雑な表情の少女がノートを前に広げて、自分の番を待っている。彼女の隣の幼い子も同じ思いで気がでないようだ。彼女の後ろに立

つ少年は、帽子を目深にかぶって熱心に課題を読み直し、最後の点検に余念がない。もう一人の少年は、不幸にも叱られている子ども方を自信ありげに見やっっている。そして、この一団の後方には、机に向かつてしきりに羽ペンを動かす、熱心に課題に取り組む子、それを眺める子、壁のスレートをとろう（あるいは壁に掛けよう）とする少年の姿が見える。

教師が生徒に基本的な読み書きを練習させ、算術の課題を出し、公教要理を暗誦させ、その成果を一人ひとりチェックする。当時の初等教育の現場を髣髴とさせる貴重な視覚資料である。できの悪い子どもへの容赦ないお仕置きはなかでも注目に値する。カルヴァン派は、子どもには人間の罪深さが本性として入り込んでいて、子どもも親に立っていた。そのカルヴァン派の流れをくむ学校で、子どもが業として背負った罪を教師が厳しい規律、体罰で矯正したとしても不思議はない。子どもたちの暗誦カリキュラムにも入っていた旧約聖書箴言（一三・二四）の言葉、「鞭を控えるものは自分の子を憎む」

は、その際、さぞかし心強い支えとなったことだろう。

ただし、すべての親たちが体罰に合意していたわけではない。ある十六世紀末の記録は、親が文句を言うので必要な体罰ができない、という教師の訴えを紹介している⁵⁾。十七世紀の人氣の著述家カツツも、カルヴィニストの立場にありながら、「若い心を力で抑え込むのは望ましいことではない。子どもは寛大に扱ってやるべきだ」と書いている⁶⁾。教師が怒りに任せて子どもを鞭打つといったこともあり、こんな言葉が出てきたのかもしれない。こうした体罰に眉をひそめる人々の声は、しかし、体罰肯定の滔々たる流れのなかにあつてあくまで少数意見にとどまっていた。

寄り道になるが、体罰を与える側の教師の資質についても少し触れておこう。教師の選任に配慮が欠けている、「十三ギルダー払えば誰でも学校が開ける」といった苦情は、すでに十六世紀末から聞こえていた⁷⁾。一六二〇年の記録は、長年教師を務めている者のなかに実は字が読めない者、算術がほとんどできない者、そもそも教

える気がない者がいるとの嘆きが記されている。十七世紀半ば頃になると、自宅で子どもたちに教えるには教会の試験をパスし、しかも、ときに教会の監査を受けることが義務付けられたが、それでも、教師が子どもを墮落させるといった風評が絶えることはなかった。いわく、

宗教心が足りない、タバコを吸う、悪所通いをする……

そして、なかでも大きな批判が集まったのが教師の飲酒癖⁹⁾。そうだとすれば、《村の学校》(図3)の壁にかかるのも、水差しではなく、ワイン差しということになる。

とはいえ、教師の方にも同情すべき事情が十分すぎるほどあった。生徒が集まらない、カリキュラムの了見が狭い、労働時間が長い、教室内が騒がしいなど、教師をめぐる待遇・環境は劣悪をきわめていた。にもかかわらず年収はたった百ギルターほど、つまり単純労働者の年収の二分の一にも満たなかったのだ。だから、年来の教会との付き合いから墓堀りなどの副業に従事したり、生活保護を受けなければ食っていけなかった¹⁰⁾。これで優秀な人材が集まったら、むしろ驚きとすべきだろう。世

間はしつけや教育の重要性を認めてはいたものの、なお教師をまっとうな職業とみなしていなかったのだ。スティーンの作品に限らず、当時の絵画に描かれた教師の姿にいつどこか胡散臭さがつきまとうのは、そんな背景があつてのことなのだろう。

十二歳で初等教育を修了すると、経済的条件に恵まれ学び続ける意思のある男児には、古典の教養を身につけるラテン語学校、そして大学というさらなる勉学の道が開けていた。十七世紀末の数字だが、大学進学は四〇人に一人、率にして二・五パーセントに上ったといわれる。一方、女兒は、たとえ能力があろうと、裁縫学校かフランス語学校、あるいは家庭教師について勉強を続けるしかなかった。当代きつての才女アンナ・マリーア・ファン・スヒュールマンについては、例外措置がとられ、ユトレヒト大学の聴講が許されたが、別室から壁越しに講義を聴くという、苦肉の条件つきだった¹¹⁾。

詩人ヤーコプ・カツツの著書『結婚』に添えられた図



4 ヤコブ・カッツ『結婚』（ハーグ、1632）より

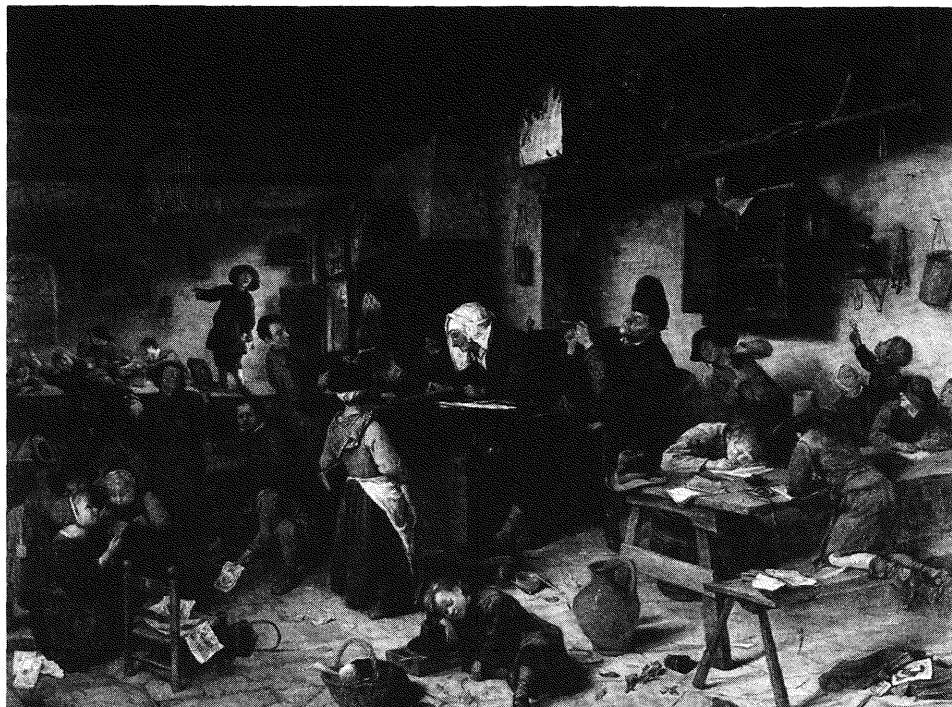
版（図4）は、そうした男女の教育の差の端的な例証となろう。¹²⁾ 一家七人の団欒の図であるが、父親は膝に本を置き、読み書き・幾何学・美術の基礎を学ぶ二人の男児の相手をしている。これに対し、乳飲み子に授乳する母の傍らでは、姉がレースを編み、妹が人形ごっこに夢中だ。男児は知的好奇心を育てられ、女兒は家庭の仕事を教え込まれる。西洋の絵画の伝統では、男性が陣取る画面右側（向かって左）が高等な位置、女性が陣取る左側（向かって右側）が劣った場所とされていた。とすれ

ば、男女の教育の差にはジェンダー的視線の差が関係していることになろう。

この図を十七世紀の教育者デスワーフの以下の言葉と重ね合わせてみよう。

「このこと「親は子供の性を考慮して職業を選ぶべきこと」には注意しておく必要がある。なぜなら、共和国やコミュニティーのあらゆる重要なポストについて仕事をすることは男性たる者の義務であり、この義務が家族に利益をもたらしてもするからである。他方、女性の子供の面倒とか家事といったもつと普通の仕事に責任を持ち、子供たちに手をかけ、家の中のことが万事つつがなく運ぶよう目配りをしなければならない」¹³⁾

男と女には明らかに異なる社会的役割りが期待されており、それ故にこそ男と女で教育機会に差がつけられていたのである。アリストテレス、聖書、ガリレオ——女性が男性に劣る性だという言説が連綿と繰り返されてきたとすれば、その差は、単にそれぞれの性に備わる特性



5 ヤン・ステーン《小学校》、1670年頃、エディンバラ、スコットランド国立美術館



5-1 (上)、5-2 (下)
図5 細部



6 ラファエロ《アテネの学堂》、1508-11年ローマ、ヴァチカン、署名の間

を生かした結果などとはいいがたい文化的「所産」の賜物というべきだろう。

こうした諸々を念頭に置きながら、ステーンが描く学校の様子をもう一つ眺めておこう(図5)¹⁴⁾。広々とした部屋の中で思い思いに課題に取り組む子どもたち、年少者の面倒を見る年長者の姿が生々しくと描き出された優品である。課題ができあがり、教師の前に並ぶ子どもたち。白い頭巾の女教師は、キセルで間違いを指摘し、できが悪ければ右手の鞭で容赦なく子どもに体罰を加える。奥の方では、勉強なんかクソ食らえとばかりに、悪童どもの悪ふざけが延々と続く。彼らには、後で厳しいお仕置きが待っているはずだ。

ステーンは、この無秩序な学校にさまざまな仕掛けを張りめぐらしている。男教師の羽ペンを削る仕種は勤勉を意味する。彼の胡散臭さといかにも対照的だ。彼の後ろ、戸棚の脇には昼だというのにランタンが灯されている。その脇には眼鏡を外した知恵の鳥ミミズクの姿が見

える。「ミミズクが見ることを拒めば、明かりや眼鏡も役立たず」という諺を思い出させようというのだ。たとえ才能に恵まれていても、やる気がなければ教育は無力なのだ。さらに、作品のところどころに——たとえば、画面右端の三人(図5の1)、前景真ん中の眠る少年(図5の2)——、ラファエロの描く学問の殿堂、かの《アテネの学堂》(図6)の細部が借用されている。そして画面右下には打ち棄てられたエラスムスの肖像画。絶望的な子どもたちの教育の現場と理想のアカデミーとオランダが生んだ偉大なる教育者との重ね合わせに、教育に対するステーンのユーモアいっぱい、大らかな懐疑と共感が読みとれる。

大人も、そして子どもたちも、しつけ、教育の過程で、通念と化した価値の体系の中に知らず知らずのうちに関わり込まれる。その体系の外に出て、世界を別様に理解・判断し、新たな体系に思いを馳せるなど、おいそれとできることではない。そんななかであって、ステーン

の諧謔の視線には、文化的所産という偏見を相対化する強靱さがある。教育の力と危うさ。ステーンは、画家としての創意を通じて、実にやすやすと教育の裏表を見せつけているようだ。

(目白大学)

註

- 1) *Jacques de Gheyn II als tekenaar 1565-1629* (exh. cat.), Museum Boymans-van Beuningen, Rotterdam, 1985-86, p. 66
- 2) Majorie E. Wieseman, *Caspar Netscher and Late Seventeenth-century Dutch Painting*, Doornspijk, 2002, p. 220-30
- 3) 小林頼子ほか訳著『ヤン・ライケン 西洋職人図集』、八坂書房、二〇〇一、一四三頁
- 4) *Ibid.*
- 5) *Mirror of Everyday Life. Genreprints in the Netherlands 1550-1700* (exh. cat. ed. by E. de Jongh et al.), Rijksmuseum, Amsterdam, 1997, p. 290
- 6) *Jan Steen. Painter and Storyteller* (exh. cat. ed. by H. Perry Chapman et al.), National Gallery of Art, Washington, 1996-97, p. 254
- 7) M. F. Durantini, *studies in the Role and Fraction of the Child in Seventeenth Century Dutch Painting*, (California, 1979, p. 193
- 8) *Von Frans Hals bis Vermeer* (exh. cat. ed. by P. Sutton), Gemäldegalerie, Berlin, p. 301
- 9) *Ibid.*
- 10) 小林頼子ほか訳著『ヤン・ライケン 西洋職人図集』(註3) p. 143
- 11) 小林頼子『フェルメールの世界』、NHK出版、一九九九、一七一頁
- 12) *Jacob Cats, Houwelijk, Middelburg, 1632*
- 13) 小林頼子『フェルメールの世界』(註11) 一七〇頁
- 14) 本作品の細部にうつづは *Jan Steen. Painter and Storyteller* (註9), p. 212に詳し。

現代おもちゃと子どもの世界の文法 その一

セクシャリティ / ヴァーチャルリアリティ
— 性差 / 仮想現実 / 感受性 —

森下みさ子

手遊びから電子おもちゃへと革命的ともいえる変化をとげた子どもの遊びの世界は、今を生きる子どもにとつてどんな意味をもつものか、それは大人社会にどんな問いを投げかけているのか、現代の流行に詳しい森下みさ子先生からお話しいただいた。

男の子をひきつける「戦う」遊び

——最近の子どもの遊びやおもちゃの流行から、子どもの世界に起きている動きをわかりやすく読み解いていただけませんか。

森下 子どもといっても対象とする範囲が広過ぎるので、幼稚園のちよつと上ぐらいから小学校ぐらいまでに絞って、男女で分けてお話しします。子どものおもちゃや遊びに関する場合、男の子が好む遊びと女の子が好む遊びは異なることが多いですね。

男の子の場合、今までの動きをざっと見ると、基本の遊びの精神はわりと変わっていない。遊びの精神の核は、「戦うこと」。例えばそれが、実際にぶつけて遊んで戦う場合もあるし、たくさん集めてその数で競う場合などいろいろあります。具体的な例だと、最近まで流行つ

ていたペーブレードというコマがありますね。あれも、もともとはペーゴマでしょう。

ペーゴマとペーブレードがどう違うかというところ、「戦う」というところでは同じ。けれども、従来のペーゴマだと、ひもを巻いて回せるようになるまで、それなりの時間と労力と、それから周りの手助けが必要です。

おもちゃというときに、ただ物があっても、これはおもちゃですと置いてあっても、それは子どもにとつてはおもちゃじゃない。「遊ぶということと一緒に初めておもちやに命が宿る」と考えると、「おもちゃとの対話」がうまくできてくると、それがおもちゃとして生き生きとした遊び相手になってくる。ときにはすごく大事な相棒になってくるでしょう。そう考えたとき、その対話がどう成立するかが、おもちゃと子どもの最初の出会いにおいて必要になります。

「戦う世界観」が先に成立

森下 昔のペーゴマだと、その対話が成立するまでに時

間と労力が要る。最初、回ってほしいと思っても全然回ってくれないのを、ひもの巻き方から教わって、何度もやってみる。男の子は経験があると思うんですけども、ひもに鼻の脂や手の脂をすり込むようにして、自分の手にしつくりくるひもに育てていく。自分の手も巻き方を覚えてくるし、ペーゴマをやったときの投げ方と引き方は、特にこう、うまく引かないと回らないわけですから、自分の言葉がコマに通じるようにしていく、その最初の会話に時間がかかるんですね。でも、それが流行おもちゃになると、その「子どもとおもちやと最初の会話の部分」を省いちゃう。だから、だれでも回せる。

ペーブレードの前にキャラコバチというのも流行りましたが、これは、キャラクター・コマ・バッジというのがくつついたもので、キャラクターがついていて、コマで、バッジにもなる。それは、誰でもすぐに回せます。

販売されているシューターにセッティングすれば、それだけで回せちゃう。じゃあ、何がおもしろいかというと、キャラクターがついていて、勝負しながらそれを集



めていくというおもしろさですね。

伝統的なコマというのは、まずは回せるようになってから、その後に「戦う世界観」ができてきます。例えばペーゴマでも、ただコマとコマがぶつかっているんじゃないかと、こっちはお相撲でいえばだれだれ、あつちはだれだれというように相撲の力士同士がぶつかる世界観を後でくつつけると、どんどん迫力が増してきて遊べるのだけれども、「流行おもちゃの場合は、逆に世界観のほうを先」に用意されている。それはテレビやマンガ、ゲームで与えられた世界観で、それをとってすぐ回せる。だから、最初の対話が省かれていて、世界観という第二の対話のほうから先に入っていく。

おもちゃに「自分の力」を入れることへのこだわり

森下 じゃあ、そういう世界観だけで遊んでいるかというところでもない。キャラコバチよりもペーブレードが

長続きたのは、ペーブレードは世界観もあることはあるけれども、最後に入力する、「コードを引くのが自分の手」なのです。だから、全部シューター任せにするのじゃなくて、最後に自分の手が加わるというところに男の子は情熱を捧げられる。だから、昔のペーゴマほど難しくはないけれども、自分の力を入れるということにはこだわりがあるんだと思います。

ただ、昔のペーゴマだと、強くするために手でいろいろな操作をする。ひもの巻き方を工夫したり、ペーゴマを削ったりするでしょう。削って低くしたり、鋭くしたりして、相手のコマをはじくようにする。そういう「育てる」ところが、例えばペーブレードだと、新しくパーツを買ってきて組み合わせれば、強いペーブレードができる。だから、そういう意味では、新しい情報を敏感にとってきて組み込むということが、今のペーゴマには必要なのです。でも、最後の入力は自分の手。そういう意味では、「デジタルな情報と、それから最後に入力する手」というアナログとをあわせるということに、今の

遊びの主力」があるといつていいでしょう。

——シューターは切れやすくないですか。

森下 切れやすいし、切れるぐらい、力をこめてやるんでしょうね。見ていると、ピューッと回すときがすごく格好いいというか、男の子たちの間でも、多分あれが魅力なんだと思います。おとなしくシューターか何かでボンと落とすよりは、自分で引く力によってコマが回るといのが快感になっていると思います。

「手を動かして遊ぶ」携帯ゲーム機の流行

——今、子どもたちの間で、だれもが持っているおもちやというのは、男の子の場合は何がありますか。

森下 好き嫌いは別として九割以上は携帯ゲーム機を持っていますね。特に、子どもたちが多分一番興味をもっている、手に入れ始めているのは、任天堂のDSですね。DSがおもしろいのは、従来のゲーム機はボタンとキーで操作するだけなのに対して、任天堂DSはタッチパネルがついていて、ペンでタッチすることで動か

す。ペンを使うけれども、結局「手で入力する」んです。そうすると、例えば描いた絵がそのまま画面に出てきたり……。

——より積極的に自分がかかわれる。

森下 そうそう。だから、おもちゃに非常に近くなっている。体全体まではいかないけれども、例えば雪だるまを画面上で転がすとか、画面上でパチンコを手で引いて放つとか、画面上で描いた絵がそのまま動き出すとか……。

——登場人物のキャラクターになっていくということ？

森下 そうですね。つまり、「デジタル情報にアナログ情報を入れていく、組み合わせていく」というゲーム機が、多分子どもが欲しいゲーム機の一つだと思います。

大人も参戦できる街頭ゲーム

——今、子どもが遊んでいる場面自体をあまり見かけないのですが……。

森下 でも、熱気がある場所もあるんですよ。幼児の間

で流行しているのはムシキング。デパートとかおもちゃ売り場へ行くと、小さい子がずらっと並んでいて、若いお母さんも一緒に遊んでいますよ。

遊び方自体は単純で、要するにじゃんけんなんですよ。グー・チョキ・パーで戦うだけで、難しいゲームの知識も何も要らないし、その時出てきたカードと手持ちのカードを合わせて、ムシカードとワザカードを選んでスキャンする。後は画面を見ながらじゃんけんの法則にしたがってボタンを押していく。

そういう意味では、そんなに手を使う遊びでもないのだけれども。ただ、おもしろいのは、ムシ同士の戦いの画面が結構迫力があるんですよ。虫同士のプロレスですね。

——そうすると、鼻がむしられたりとか、節が飛んだりとか……。

森下 ばらばらになるような画面はなくて、技が決まると、いかにも「勝った!」という感じの画面になって……。本当の虫の戦いとは違うモニター画面ならではの

描写です。

——虫化されたキャラクターの戦い？

森下 そうですね。百裂拳なんていうすごい技もあってね。おもしろいのは、ゲーム機の前に並びながら、待っている子どもたちも見ている。画面が見応えがあるからでしょうね。見ているも飽きないからギャラリーが増える……。

——映像が精巧に作り込まれているんですね。

森下 そう。それに携帯ゲーム機のような小さい画面で一人でやるよりは、ギャラリーがいることで盛りあがる。

——みんなで戦いごっこを観戦できるんですね。昔のプロレス中継みたいな感じかな。

森下 そういう感じ。「おーっ」とか言ってる見ている……。子どもにすれば、百円入れるとカードは出てくるし、そんなに難しくないので続けて遊べるし、結構時間をかけてやったりもできる、お得感があるでしょうね。

他の子が遊んでいるのも見られて、自分が待っている間も全然退屈しないというか。だから、ゲームに精通して

いない人でも、ちょっとやれば結構勝てたりするから、そういうおもしろさはあります。

ヴァーチャル（仮想現実）から

現実へと関心が向かう

森下 おもしろい動きだなと思って見ているのは、ムシキングが流行したせいで、今年は、それを使って実際の虫を飼うグッズがおもちゃ売り場に並んでいることです。セットになっていて、虫かごから、えさから、カブト用の木まで売っている。実際の虫もちろん売っています。前から虫はデパートの屋上なんかで売られていたけれども、ああいう高級品というよりは、子どもがすぐに育てられるようにセットになっています。

そう考えると、今の子どもって、「ヴァーチャルから入って、そこから現実に行く」のかもしれない。私たちの場合は、現実にあったものを今度はヴァーチャル化するという路線を踏んでいたと思うし、保育者側の感覚としては、現実にあるものからヴァーチャルに向かうよ

うに思っているけれど、今の子どもたちの体験としては、「擬似的な自然から入って、じゃあ、本物を探しに行く」になるんでしょうね。

上の世代と実際の遊び体験は違うけれども、どこかでつながる可能性はあって、さっきのベープレードに戻すと、ベープレードである程度遊びを満喫した子は、次にどうするかというと、ベープゴマに興味をもつ。ベープレードよりも、自分がかかわる余地が大きいから、さらにおもしろいわけ。でも、最初から手のかかるベープゴマに取り組むんじゃないくて、おもちゃとの面倒な対話はとりあえず省いて、まずは流行っているベープレードにはまって、でもそれをこなしてしまうと、今度はより細かい対話が必要なベープゴマのほうに興味が移っていく。児童館なんかで、ベープレードとベープゴマを両方用意しておく、最初ベープレードで遊んでいて、そのうちベープゴマに移ってきて、だんだん児童館の職員や児童館に来るお父さんやおじいちゃんを相手に対戦していく……。

——人間関係の広がり新しくできるんですね。



森下 コマを回して戦うというところから交流が生まれるんですね。だから、必ずしも流行おもちゃがだめとか、ヴァーチャルがだめというふうにも言えない。今の環境からいくと、そういうものが先にきて開かれていく可能性もあります。

——そのほうが、より自然なのかもしれない？

森下 ただ、ヴァーチャルな体験にしても、ペーブルードにしても、「触れたものが反応を返す」ということがすごく大事で、そういう点からいくと、本当に生まれて間もない時期に、「触れたものが反応を返す」という体を使ったやりとりの感覚を養うということは絶対に必要だという気がするんです。泣いたら応えてくれる。触ることを感じる。触れることで何かが起こるとか、はね返ってくるといったみたい。

そういう意味では、「ゲームを楽しめるということは、それ以前の体験ができていないと、ゲームさえ楽しめな

くなる」と思うんです。最初からゲームのような間接的な体験だった場合は、その後、物や人との関係が築けないうし、そうになると、遊びということでヴァーチャルな体験自体も楽しめなくなっちゃう。

生まれて何年間かの間に、「この世界に生まれてきたことで自分が受け入れられている」とか、「自分もこの世界を受け入れる」というベースができていくかどうかだと思います。今の子ども遊びをどこかで信頼してあげたいと思うけれども、だからといって最初から子どもが興味をもつままに画面の刺激的な動きにまかせてしまう、そういうものに子守りをさせてしまったら、遊ぶおもしろさ自体が育たないと思います。現実とは異なる遊びとして楽しむためにも、そのベースとなる、この世界のリアリティーは最初に体で感じ取っておかないといけない。

女の子をひきつける「装う」遊び

——女の子の場合は、どんな遊びやおもちゃが流行していますか？

森下 今の女の子向けの市場で一番多くを占めているのは、化粧玩具とか自分自身が着る物、つまりメイクとファッションが女の子の遊びの主流になっています。

男の子の興味が「戦い」なのに対して、女の子は、「装う」「飾る」のように、どこかに自分自身が必ず入る。自分とのかかわり、自分の延長におもちゃをもつてきて遊ぶことが多いですね。

——自分の世界が延長していく感じでしょうか。美意識のように。

森下 そうそう。もちろん、女の子の遊びやおもちゃの場合も、人と競っているところもあるとは思いますが、も、どっちかというところ「自己表現みたいなものがすごく強い」。だから、例えば何かを集めるといつても、男の子だと、カードを全種類コンプリートするとか、貴重なものをもっているかどうかで競うけれども、女の子だと、例えばプリクラなんかでも、私は何百枚も集めたとか競ったりはしないでしょう。コンプリートはあり得ないでしょうし……どこまで集めれば勝ちということはある

りません。

——私の愛するものに囲まれて、小さな幸せを感じるという、昔、シールを集めたみたいな感じ？

森下 そう。例えば、プリクラって自分が写っている場合が多いでしょう。あれも自己愛みたいなもので、女の子ってすごいでしょう。

——執着しますよね。

森下 お友だち同士でも撮るし、ちょっと知り合うと、すぐに交換したりして。あれはやっぱ自分の世界の延長ですね。「自分を飾るとか、かわいいものとか、きれいなもので人とつながるとい遊び」をずっとやってきたと思う。今、メイクとファッションと言ったけれども、昔だったら、オシロイバナやお母さんの化粧道具を使ったり、ファッションも、紙の着せ替え人形やリカちゃんのようなファッションドールに着せたいものを着せて満足していたわけですよ。ドレスとか、毛皮のコートとか、自分で描いたりして着せていた。そういうものに憧れるというのは、ずっとあったと思うのね。

タブーが解禁された子どもの化粧

——今、市場としても、子ども用化粧品は大きいんでしょう。

森下 大きいと思います。だから、何が違ったかという、子どもは本物のメイクはしないという「タブーが解禁」されちゃったんでしょね。

——母親自身が全く躊躇なく化粧品を買い与えるでしょう。

森下 そうそう。ネイルもしているし、ほんとうにメイクしている子もいますね。ここに持ってきたのはセーラムーンファンデーション。学校や幼稚園には化粧をしていけない子も、ちょっと出かけるときにする。親のほうも、わざわざ買ってあげているわけだから、子どもに化粧することを解禁しているんでしょうね。子どもに化粧を許す現象がいつから始まったのか、どこで社会のタブーが解かれたのか。最初は売る側のためらいがあったと思いますが……。

——マニキュアは私たちが小さいころからありましたよね。

森下 マニキュアって、顔そのものを操作しないということもあるし、さっき言ったように、女の子のメイクって自己愛でしょう。だから、大人になると、人に対してまず見てくれがどうか気にするけれど、「子どもの場合は、自分がかわいいのが見えるほうがいい」のね。

——爪はそうですね。

森下 そうそう。親も、「爪ならいいか」と。どうせ切っちゃうし、洗えばとれるし、害もあまり感じないから、子ども用のマニキュアは以前からあったし、シールを爪に貼ったりもしていましたよね。

市場化された身体加工

——子ども用のアニメのキャラクターのドレスというのが、昔もないわけではなかったけれども、冠からアクセサリー、靴まで揃った完全装備なタイプのが割と簡単に買えるようになり、かつそういうドレスで子どもが

着飾って人に見せる場ができてくるのは、いつくらいなのでしょう？

森下 市場がそういうニーズにうまく乗れたのは、セーラーMoonですね。セーラーMoonの中で少女たちが「メイクアップ!」と叫んで華麗に変身しますよね。テレビ番組のキャラクターに憧れてマネをするというのは以前からあったわけですが、セーラーMoonの場合、マネ遊びの延長上にメイクできる玩具を置くことができたわけです。

でも、たとえそういうふうに市場が売ったとしても、今までの社会だったら、それに乗らなかつたと思います。例えば、以前ひみつのアッコちゃんのコンパクトが流行ったけれども、それは本当にお化粧に使うコンパクトとしては売っていなかつた。テクマクマヤコンの変身道具として売ってはいたけれども、お化粧していいというコンセプトはなかつた。そういう意味では、一つの理由づけにセーラーMoonは使われたけれども、背景には、もつと大きい社会の変化がある気がします。

——変身願望？

森下 変身願望はあるでしょうね。ただ、子どもがというより、「大人のほうに、身体を造作するタブーの垣根が非常に低くなっていった」という変化があると思います。男性もボディケアをよくするようになったし、ピアスからプチ整形まで、身体加工を施すことに抵抗がなくなってきた気がします。過剰なまでの健康食品ブームもその一つですよね。

——理想的に造成し直すんですね。

森下 作る側の技術の問題もあるけれど、それを導き支えるだけの欲望というか需要が高まってきたのだと思います。

次号へ続く

(聖学院大学)

インタビュー・平成十七年七月十六日

構成・首藤美香子(お茶の水女子大学)

保育の変革を目指して(2)

―折々に考えたこと―

入江 礼子

保護者会の立ち上げから得たもの

変化の兆し

二〇〇六年二月に行った二〇〇五年度二回目の「保育参加ウィーク」に参加後の話し合いでのことである。四歳児と五歳児の保護者が混ざっての話し合いであったが、四歳児の保護者がこんな感想を述べられた。「私は今、三番目の子どもがお世話になっていきます。上二人とは十歳以上年が離れているので、本当に久しぶりの幼稚園で一日を体験させていただきました。とっても懐かしいなと思いました。子どもたちの思い思いに遊んでいる姿を見て、よく次から次へと考えられるものだと感心しま

した。ところが一つ、びっくりしたことがあります。それはお弁当の時間のときのことなのですが、娘はまだ食べ終わってはいませんでした。けれどお隣に座っていたお子さんが食べ終わってすぐに遊び始めました。私はごちそうさまをする前に遊び始めるのが不思議だったのでもう『ごちそうさまをしなくていいの?』と聞きました。そうしたら『食べ終わったら、静かに遊んでいいんだよ。もう少し食べ終わった人が多くなったらみんなでごちそうさまするの』との答えが返ってきました。ちょうどそのとき、ほかのお子さんが『タンバリン』をたたき始めました。その音がするので娘もだんだん落ち着かなくなり、食べ

ることへの集中がなくなってきました。私はおかしいと思うのですよね。やっぱり食事のときはごちそうさまが終わるまでは少しは静かに過ごせないものでしょうか。もちろんこれを幼稚園にすべてお任せしようとは思っていません。この食事のときのしつけは家庭での責任でもありますから、私も気をつけようと思っています」。

続いて次の保護者の方はこんなことを述べられた。「今日は、息子ととことん付き合おうと思ってきました。家では私が自分の仕事をしてしまつて、ついつい子どもが後回しになり、息子の落ち着きがなくなってきたのです。ですから今日はいっぱい遊びに付き合いました。これで少し落ち着いてくれるのかなと思つています。それともう一つ、生活面がどうなつていゝるかも知りたかつたので、ロッカーの中をのぞいてみました。そうしたら案の定、着替えた洋服も、作つたものもごちゃごちゃになつていて、遊んだあと私はそのロッカーの片づけをしました。息子はお弁当後の片付けもひどく、お弁当箱を包まず、そのまま、園かばんに突っ込んでいまし

た。本当に恥ずかしく思いましたが、こういうことは園と家庭の二人三脚でやつていくものだとこのことを痛感しました。家でもがんばりたいと思います」。

この二人の保護者の方の発言のなかに私たちが五年間待ち望んでいた言葉があつた。それは「家庭でも気をつけますから」「こういうことは園と家庭の二人三脚でやつていくものだということを痛感しました」という二つである。こう書いてしまうと、まったく当たり前のことのようにみえるが、このような言葉が保育参加ウィーク後の話し合いに出たのは初めてのことであつた。いつもはたいてい「これは、どうなつていゝるのだろうか」という疑問は「幼稚園の方で何とかしてほしい、幼稚園のしつけがなつてない」ということを言わんが為ゝに発せられていた。もちろん私たちにもいろいろな至らなさがあるので、園の責任と考へてこれを真摯に受け止め、改善点は改善すべくがんばつてきた。でも正直なところをいうと「これは園だけの責任ではない。むしろ家庭のしつけ、あるいは家庭がきつゝいからこそ、幼稚園でこんな姿

が出るのではないかと」と、親に向かって「園としても気をつけてやっていきたい」という言葉を返したことは裏腹に、そんな反発をもったことも事実である。つまり「共に支え、つながり、育ちあう」という園の理念は立ち上げてみたものの、実際にはこの五年間どうしてもこの両者は「対立構造」になりがちであった。しかし、今回保護者の方から「園でも家庭でも」という言葉が出たということの意味は大きい。保護者会直後、私と副園長のNさんは思わず顔を見合わせた。二人とも保護者会も第二ステージに入ったと直感したのである。

保護者会「フリージア会」の変遷―立ち上げ―

保護者会を立ち上げたのは今から五年前である。それまでこの園には保護者会はなかった。これは前回も述べたが「保護者会があれば保育のわからない親が言いたいことをいつてくる可能性があるので、あえて混乱が起るような場を作る必要はない」という考え方に立脚したものであった。しかし私は現代という消費社会・少子社

会に幼児を育てていかななくてはならない保護者の不安を受け止める場として、またそのような時代に専業主婦という役割を選んだ保護者が多い幼稚園として、子どもが幼稚園時代を送るときに保護者もまた幼稚園が一つの自己実現を遂げる場としての役割を果たせないかと考えていた。それと「閉じられた組織は必ず腐る」という思いもあり、保護者の会を立ち上げることで園の保育を開いていく道の一つとしたいとも考えたのである。

こうして立ち上げることにした保護者会であるが、そのときの保護者は「保護者会がないからこの園を選んだ」という人も多かった。むしろ保護者会が立ち上がることは約束違反であり、とうてい許せないものだと考えた保護者もいたのである。しかしともかくその必要性を説明し、初めは園側が取りまとめ役をするということでもなんとか出発した。クラスからはクラス役員を出してもらい、月に一度の役員会を設けることにした。ここには副園長のNさんが張り付いた。また月に一度、学年ごとに園長・副園長との懇談会を開くことにした。ともかく話

そう！ それしかない。そんな気持ちでの出発だった。

保育参加ウィークの立ち上げ

園では以前は保育室に一つずつあった観察室から子どもたちの様子を観察するという観察日が設けられていた。保護者は自分の姿を見られることなく園での子どもの姿を観察することができる。この観察室があることに惹かれて入園を希望した保護者もいた。しかし、一方的なこの観察の意味は一体どこにあるのだろうか。保護者としては自分たちがいないところで子どもたちがどのように過ごしているかを知りたいというごくごく単純な気持ちからこの観察室に魅力を感じたのであろうが、見に来たことは子どもには内緒なので、そのことについて、家庭で話すこともできない。そういうような観察は果たして親にとっても子どもにとっても意味のあるものなのだろうか。これが私の抱いた単純な疑問である。しかし保護者からは「自分たち親のいないところで子どもがどんな姿で過ごしているのかをぜひ見てみたい。園でどん

な生活をしているかが一番心配で、子どもにいくら聞いてもはつきりしないので、この観察室からの観察はなくさないでほしい」と強く要求された。結局、この件に関しては平行線のままであったが、観察室からの観察を廃止する代わりに新たに「保育参加ウィーク」を設け、年に二、三回園に遊びに来てもらう日を設けることにした。まだまだ園のなかでも保育の改革中でもあり、その途上で保育を保護者に公開することにはとても勇気がいった。が、やるしかない。引いてしまえば、そこに待っているのは断崖絶壁。もう前に進むしか道は残されていないかった。

保育参加ウィーク〇勝×敗の意味するもの

五年前の第一回の保育参加ウィークは五日間にわたって行った。保育者にとっても保護者にとっても初めての経験である。午前中の保育参加のあと、園長・副園長との懇談会をもった。その日、参加して感じたことを率直に語ってもらうためと、三学年の親が一緒に顔を合わせ

るチャンスでもあったので、保護者同士が親しくなるチャンスとも考えたためである。この第一回目は本当に緊張した。子どもたちもまだまだ主体的に遊びを選んで過ごすということにも慣れていなかったし、保育者もまた今までのように決まりきった一日の流れを切り盛りする保育から、子どもたちが主体的に動けるように準備を進めるといふことにも慣れていなかった。そんななかで保育参加であったから、おのずと批判がいつぱい出た。保護者も保育参加なので初めから子どもと遊ぶつもりで参加する保護者と、参加するつもりは毛頭なく、参観、つまりじつと観察していくつもりで来る保護者がほぼ半々であった。保育参加後の話し合いで私たちの意図の伝わる日と伝わらない日があった。私たちはその頃それを「今日は勝ちの日」とか「今日は負けの日」と言い合った。保育を開き「共に支え、つながり、育ちあう」という理想はあったものの、実際の保護者との対応では「勝ち」「負け」という言葉が象徴するように、保育者と保護者の関係は相対峙するものであった。

保育参加ウィークに仕掛けをする

第一回目を行ってみて、特に子どもと一緒にたくさん遊んでくれた保護者からは大方「子どもと一緒に過ごして楽しかった」とか「いっぺんに大勢の子をみなくてはならない先生の苦労がわかった」というような保育に対する肯定的な意見が多く出されたが、参観型の保護者からは保育に対する批判や、子どもの育ちに対する心配が多く出されたことがわかった。つまり親たちは何もすることがないと、観察者の役割を担うようになり、つい子どもをすることを否定的に捉えてしまうことがわかったのである。見に来てもらったことがマイナスになるのでは意味がない。そこで第二回目以降は親たちが何か参加できるもの（例えばクリスマスが近ければ、クリスマスオーナメント作りを入れる等）を用意し、保護者自身も楽しめるようにとの配慮を行うようになった。これには準備があるので担任の保育者は親にわかりやすい週日案（週間指導計画と日案が合体してある指導計画）

を用意したり、親が楽しめるコーナー作りをする等、かなりの準備と配慮をして保育参加ウィークに臨むようになった。案の定、保育参加後の話し合いでは「親も楽しめた」という内容の発言も多く出るようになって「保育参加を否定するような意見は少しずつ減っていった。

見せるための保育参加ウィークへの変質

こうして、保育参加ウィークに向けてはいろいろと準備することが定着していった。保育者の間には、普段の園での生活がこの保育参加ウィークの準備のためにどうしてもおろそかになってしまうので、できたらやめる方向での検討を望みたいという声なき声が広まっていった。結局年三回を予定していた保育参加ウィークは年二回、六月と二月に行うことになった。日数も五日から三日へと減った。一日に来る保護者の数が増えても参加日は少なく押さえてほしいと保育者は願ったのである。その間、保育者の準備はますます周到になり、以前のようマイナスに捉える保護者の数は減っていった。三年目

に入ると、園の方針も口コミ等で少しずつ浸透するようになり、「いっぱい遊ぶ」ことをよしとする保護者が私たちの園を選ぶことも多くなり、初めの頃のような批判は段々に影を潜めていった。

保護者と保育者のすれ違い

二〇〇四年度の第二回目の保育参加ウィークは少し緊張したものとなった。ちょうどこの年の生活発表会で四歳児のパフォーマンスがあまりにも「子どもたちのそのままの姿でありすぎる」ということで親たちからブーイングが起こった。私たちは四歳児の元気な姿が舞台上に上がってもそのまま出されており、それはどんなところでも自己を發揮できるという意味ではよいのではないかと考えたのだが、それは保護者にはほとんど伝わらな



かった。あまりにも元気な子どもたちの舞台を見ることで親たちは「子どもたちの園での生活面がどのようになっているのか」不安になったのである。生活発表会から約二週間後の保育参加ウィークでは特に四歳児の親が子どもたちは元気に遊んでいるけれど、実際にどれくらい生活面でもしつかりやっているのかを具体的に示してほしい等の意見が出された。特に幼稚園にそれを望むという声が大半であった。一方保育者の方では生活面がまだぐらぐらしている子どもたちは「家庭にもう少し協力してほしい」子どもたちであるという思いもあり、保護者と保育者間で、その溝を埋めるような動きはまだ出てこなかった。

保護者を巻き込みながら

二〇〇四年度の反省を踏まえて、二〇〇五年度は保護者を巻き込みながら保育を行っていくことの重要性を再確認しての出発となった。保護者会活動も活発化し、絵本クラブ、おもちゃ工房ピノキオ等の本格的活動も三年

目を数えるようになった。また四歳児のクラスでは保護者による読み聞かせの活動も始まった。生活発表会に向けては保護者にも準備を手伝ってもらう等、保育参加ウィーク以外にも保護者が園で活動することも多くなった。そんな中で二〇〇五年度の保育参加ウィーク二回目を迎えたのである。このとき、まずは保護者の方から「家庭でも園でも」という言葉が発せられたことは画期的であった。「保育を開く」ことを目指して保育参加ウィークを行ってきたが、今まで見てきたように、かたちは開いていても、保育者が自己防衛に走ったこともあった。しかし基本的にはボランティア形式で保護者の活動を活発化してきたことが、保護者と保育者がお互いを責め合わずにお互いに責任を担い合って、子どもを育てていくという姿勢を育ててきたといえる。たとえ行き届かないことがあっても、それを晒し、話し合うことが保護者と保育者の距離を縮める。いつの日にか「幼稚園にいつでもどうぞ」と保育者が保護者に言えるように、小さな歩みを進めていきたい。

幼稚園百三十年記念 アーカイブズ 『幼児の教育』(2)

こども
幼児の
きしゃ
汽車遊
び

和歌子

廣々とした庭園や野原に遊んで駆け廻つて居つて、さへも其活気が溢るゝばかりの幼児達、今日は昨日より降りつづいてまだやまぬ雨の為に、此處幼稚園(在東京市)の一室に籠城しなければならぬ事になりました。従つて室の隅から隅まで幼児の元気でみちみちて居るやうな心持がいたします。初のうちには窓から首を突き出して、「雨コンコン止ンデクレ」と三四児が聲を揃へて唱へて居りましたが、

やがて三十餘の幼児はそれぞれいろいろの遊をはじめました。あちらではオカツバサンの中央をチヨイと結へて鼠の尾のやうなオサゲを戴き白金巾の前垂をかけた之でも組中では年長な株の一女兒が主婦となり、四五の男女兒が子供になりて飯事が盛んに行はれて居る。こちらの隅では只一兒一生懸命に積木をして居るものがある。又繪本を前に二三兒が何か話し合つて笑つて居るものもある。五六兒を集めて自

分は宛然先生を氣取つて話をしたり唱歌をさせたりして居る兒もある。竹切を劍にした小兵士を操縦して居る小士官もある。そうこうして居るうちに最も複雑に大仕掛にはじめられ永い時間つづいたのは汽車遊びでございました。

まづ初に年長株の二男兒が何か相談らしい事をして居りましたが、やがて其邊にあつた十餘脚の腰掛を持って来ては向ひ合せ合せにくつつけて排べます。

あんなに長くつづけて何をするかと思つて居りますと、最後に一番端の一脚だけは通常に置かず立てて置きました。ハハー汽車の煙突かしらんとおて居りますと、果して其次の處には積木のはいつて箱を置きました。これは石炭でここは機関車なので。

さて列車ができ上がると技師は化して乗客募集がかりとなり、室の各方でいろいろの事をして居る幼兒達に、「汽車ニオノリナサイ」と勧めてまはります。「ハイ」と来るのもあり、「アタシ今オバサンゴツコシテマスカラ」とことわるのもあるのを、頼み廻

つてやつと十餘人の乗客ができて乗り込みました。

すると今度は切手賣兼改札係が乗客の中からも二三人現はれて、長方形の木片を「チヨキツ」と口で言ひながら一枚づつ配つて廻る。之がすむと一人が

「ボー」と言ふ。二三人が「ガタンガタン」と言ひながら兩手を大きく前後にまはす。之は車輪のつもりなので。此際には改札係が何時の間にか驛長にも車掌にも機關手にもなりすまして居るので是れ即ち發車である。乗客の中では私が先生兼阿母さんに

推され「ココは一等イトコデス」といふ處に乗せて貰つて居る。「ガタンガタン」をまじめに一生懸命につづけて居るのはとりもなほさず進行中なので、私が「此汽車はドコカラ来タノデスカ」と問

ふと、「新橋デス」と答へる。此語に連想して一兒は忽ち一同に向かつて「汽笛一聲ヲオウタヒナサイ」とすすめる。皆歌ひ出す。之に誘はれて今までの

他の遊をして居つた幼兒も皆追々集つて汽車に乗る。とうとう室中の幼兒が皆汽車中の人になる。す



こし立つと「サーコココハ上野デス」とふれてまはる。「御辨當オベントー」と木を箱にいれて賣るもの。「オモチャヤオモチャー」と其邊にある玩具を賣るもの、「本ヤ本ヤー」と繪本を賣るものなど様々である。次に又「ガタンガタン」をはじめ、すこしして「大久保、大久保」と呼ぶ。「皆下りテ躑躅ヲ御覽ナサイ」と言てまはる。私はじめ一同下車する。機關手車掌一同汽車はうちすておいて案内の勞を執り、「ホラコンナニクレイデス」と、をりしも机上の花瓶に生けられてある躑躅の花を指す。「クレイデスコト」などと言つて居ると、「今度は名古屋二行キマスカラ早くオノリナサイ」と親切にも知らせて呉れる。即ち乗る。「ガタンガタン」がはじまる。「エ——名古屋二行ク時ニハ富士ノ御山方見エルンデス」とふれてまはる兒がある。「ドレドコニデスカ」と問ふと「ホラ御覽ナサイ」と大急に駆け出して往つて黒板に白墨で富士山を書く。車掌先生二三人また駆け出して、面白がつて書く。

忽ち、富士山が三も四も見ゆる事になる。立ち歸つて又「ガタンガタン」をはじめ「日光、日光」と呼び、「モー下りテ下サイ」と一同に言ひ皆下りる。次で客車も機關車も烟突も皆元の腰掛にかへり此遊は終りました。其翌日も亦雨天で、やはり室内で右のやうな汽車遊がはじまり、二度目の事とて乗客も勝手が分つたと見えて、車掌其他の人の命令規律によく従て居りました。そうして此日には重に大森、横須賀を呼び、前にあつた發車、進行、辨當賣などの事柄の外に新しく、「モー夜ニナリマシタ」「サーモーオキナサイ」「サーモーオキナサイ」などと乗客にふれてまはる事が加へられ、前に木片なりし切符は紙片に改良せられ、私の居る處には「先生ノトコハキレイニシテ上ゲマセウ」とて、車室に（實は腰掛のよりかかりに）繪をぶら下げました。又二三日の後雨天の日に、第三回のが企てられましたが、其時には以上の事柄の外に「ピシヤン」と

い言ひながら客車の戸を開閉する事、「暗イカラアカリヲツケマス」とことわりながら客車の方々に来て上に向いては、「バチツ」と燧寸を擦り燈をともし事が加はりました。

右はまるで辻褃の合はぬ大人の夢の話の様ではございませんが、其背理的で大人からは可笑しい處のまじつて居りますのが、それが即ち幼児の幼児たる處で、遊嬉は實に幼児の生命である。と申しますが、此汽車遊をひとついたしまして、幼児は幼児だけの規律を守つてする事でございますから、規律に従するといふ習慣も養はれますし、多勢ですることでございますから、相互の協同一致といふ分子も無論必要でございますし、一緒におもしろく遊べば遊ぶほど社交的感情も他愛の感情も温まりますし、其邊にある物をいろいろに利用してするのでございませから、思考工夫の力も養はれます。かく數へ立てますと此汽車の遊びから幼児達が受けた利益はなかなか少くはございません。又違つた側から考へ

ますと、「幼児はこういう事に興味をもちます。こういう事を観察記憶して居ります。こういう風に思想を發表します。」といふやうな事を、幼児自ら演じて私の目前に提出して居る事にもなりますから、私た此遊を見て感じた興味も一方でなく、又参考の材料にもなつた事でございます。

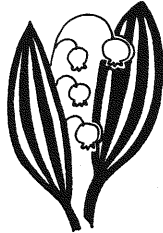
序に書き添へますが、それは、此遊は私が別に指図めいた事を少しもいたしませんで、幼児になりて遊んだのでございますから、従て此遊は全く幼児の力で企てられ考へられ實行せられましたので、衆兒は自由意志を實行する事のできる為に非常の愉快を感じ、一回一回と其しかたや事柄が進み、且つ注意の継続の短い幼児の集合であるにも拘らず、第一回には一時五十五分間、第二回には一時十五分間、第三回には一時五十分間といふ風に幼児としては永く注意がつづけられ興味を有つて居つた事でございます。



* * *

この記録は一九〇三（明治三六）年の「婦人と子ども」（本誌の初期の名称）第三巻第七号に掲載された。六月号にちなんで、雨の日の保育である。国吉^註によると「おそらくこれが日本で最初に活字の形で報告された保育の記録」であるらしい。しかし、この記録の仮名遣いや言葉遣いなどもし現代風に修正されていたら、一世紀以上も前のものとはまずわからないだろう。

子どもの言動をとらえて「辻褄の合はぬ大人の夢の話の様」ではあるがそのような「遊戯は実に幼児の生命」である、という見方は先端的である。また自主的な遊びにおいて「規律に服従するといふ習慣」「他愛の感情」などを学習できるのだという目的志向的な考察をする一方で、「幼児自ら演じ



て私の目前に提出している」ところの「興味」「観察記憶」「思想」について「参考の材料にもなった」とする、関係的な省察の姿勢もあることに驚かされる。保育史の常識からすると、この頃はまだ恩物は箱の中に大切にしまわれていたはず、また小刻みな時間割で生活が細分されていたはずなのである。その意味でこれは「記述された保育の歴史」を裏切っている」記録なのだと言吉はいう。（編集部）

註

国吉栄「子ども理解と歴史」森上・浜口編『子ども理解と保育援助』二〇〇三 百九十九―百九十三頁

☆この連載は、日本の幼稚園創設百三十年を迎え、本誌の昔年の記事を振り返り、現在の私たちの立ち位置を確認する作業の一助にと企画しものです。

編 集 後 記

『サザエさん』では、カツオ君がワカメちゃんが駅前で雨の日に、会社帰りのお父さんを待っている。自分の傘のほかに、もう一本のこうもり傘。傘をもって人を迎えに行くなどという手間のかかる行為が、なんとなく懐かしい。今なら、急に雨に降られたときは、コンビニなどで安いビニール傘を買ってしまえる。幼稚園の頃、傘と長靴をもって迎えにきてもらった記憶がある。普段は友達同士で帰るのに、お母さんと帰れる。いっぺんに特別な日になった。

特集「雨の日の保育」を読んだ。やはり雨はついつい悪者になりやすいようだが、一方で日常通常の保育

に慣れたまなざしをみずみずしくさせる恵みの雨ともなっていることに気がついた。雨の日に傘をさして園庭へ出て遊ぶ子もあるし、あらためて屋内の落ち着いた雰囲気を味わいなおすような子もいる。雨の日、人は包まれる経験をする。雨だれという透明のカーテンに包まれ、また雨粒のぼつぼつと傘にあたる音は個人的な世界をつくりだしてくれる。屋外にいても、部屋の中でも、子どもは包まれている感じにひたる。子どもが育つ上で庇護されている感覚をもつことは重要だといわれる。庇護、すなわちひさしの中で待ち守られることである。雨の日の雰囲気は、包まれ庇護される自分自身に出会いやすいのかもしれない。

*本誌へのご感想や投稿希望などは
youjinai@yahoo.co.jpまで。(浜口)

幼 児 の 教 育

第一〇五巻 第六号

(二〇〇六年六月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十八年六月一日

編集兼発行人 浜 口 順 子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8600 東京都文京区大塚二二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二二一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三―五三九五―六六一三(営業)

☎〇三―五三九五―六六〇四(編集)

振替 〇〇―一九〇―一一一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

食を育む^{はぐく}

総監修 師岡章
著 倉田新・徳永恭子・
野村明洋

食育実践ガイドブック

「食育」という言葉を、
「食を育む」（子どもの生活の中に存在するもの）と
捉えることを前提とし、
食育に関する実践方法・事例を、
イラストや写真を豊富に用いて、具体的に楽しく紹介します。



26×21cm/160頁
定価2,100円(税込)

【目次から】

- 子どもがかがやく食育実践の進め方
- 食育のすすめ方と実施時期のめやす
- 食育実践方法の選び方
- PART1 農で食を育む
- PART2 料理で食を育む
- PART3 環境構成で食を育む
- PART4 遊びで食を育む
- 保護者・地域に向けての働きかけアイデア
- 資料（保育所における食を通じた子どもの健全育成
（いわゆる「食育」）に関する取組の推進について/
楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～/食育基本法）

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

最

刊

新

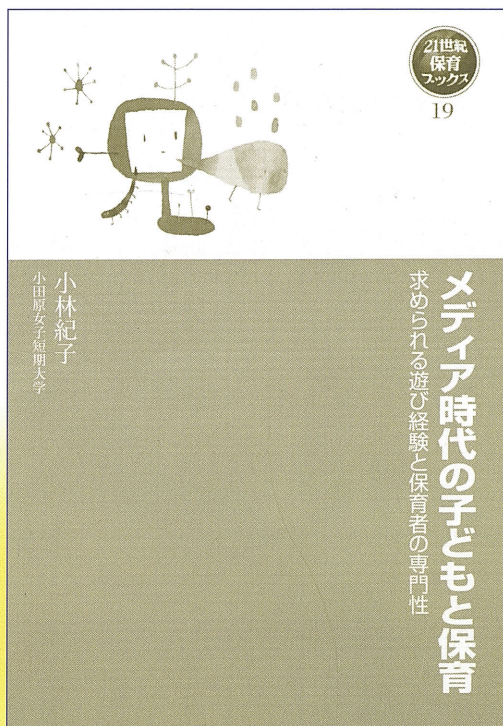
21世紀保育ブックス19

メディア時代の子どもと保育

求められる遊び経験と保育者の専門性

小林紀子 著

メディア時代の子どもに
生身の身体を通した
遊び経験の復権を願い、
「求められる遊び経験」とは何かを、
「現実と虚構を往還することの意義」などの
側面から論じていく。



●目次から

- 第1章 メディア時代の子ども
- 第2章 求められる遊び経験
- 第3章 求められる保育者の専門性
- 第4章 保育者として遊びの読み取りを！
～遊び研究の試み～
- 終章 メディア時代に生の実感を！

19×13cm/160頁
定価1,260円(税込)

キダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。